
召喚されてみたものの

紫堂 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚されてみたものの

【Nコード】

N7454Y

【作者名】

紫堂 涼

【あらすじ】

召喚されてみたものの、召喚した人間から逃げ回ることを決意。厄介事から逃げて何が悪い！
果たして彼女は召喚者から逃げ切れるのか。

第1話 銀色の光

ふわり、ふわりと柔らかな銀色の光が周りを取り巻く。

重力に逆らうように、ゆっくりと暗闇を降りてゆく私を慰めるように、その光は暖かで、近づいたその光をそっと慰撫するように撫でると、喜んだように光は光度を上げる。

形無きそれらに愛おしさまで感じ、小さく笑みを浮かべ手に触れた光にそっと口付けると、ほわりと薄紅の光を一瞬纏ったそれは、慌てたように傍を離れ、おずおずとまた近づいてくる。

現実には有り得ない光景。それなのに、不安に思わずにいられるのは、この光たちのおかげだろう。

ふわり、ふわりと光と戯れながら永遠とも思える降下の先に――
―足が、地に付く。

ザアアア……と、黒と銀に溢れていた世界が、不意に鮮やかな彩りに変化する。先ほどまで漆黒だったはずの地面は、柔らかな草と土に変わり、光射す空は青く澄み切っていた。

見たこともない風景のはずなのに、何故か懐かしく感じる。そして変わらず、私の周りを取り巻く数多の銀色の光。

心配するように、ふわふわと顔の回りで浮いている光をそっと撫でると、嬉しそうにふわふわと上下するのに、やはり自然と笑みが浮かぶ。

――私が最後に笑ったのは何時の日だろう。

不意に無表情になった私に驚いたのか、あわあわと焦ったように点滅する光に、苦笑して心配ないよと、優しく撫でて笑みを浮かべる。

こんな風に、ただ愛しいと思える存在を得たのは初めてだった。これらがどんな存在なのかも判らない。だが、純粹に自分を慕って

いるのだけは、肌で、心で感じられるから。

ずっとこの光と戯れていた気持ちを抑え、そっと首をめぐらせるが、そこにはただ雄大な自然が広がっているだけで、他の生き物の気配が欠片もなかった。

昔から気配には敏かったが、今はそれがさらに研ぎ澄まされているのが判る。他者の気配だけではなく、自然に生きる生物たちの気配までも、読み取れるほどの感覚をさらに広げてゆくが……何もひっかからない。ただ、自分の傍にいる光だけが唯一の気配だった。

「ん……取り合えず、どこへ行けば良いのかな？」

呟きに応えるように、ピッと今まで好き放題に漂っていた光が整列し、こっちこっち、と呼ぶように向かうのに素直に付いてゆくと、そこにはどこまでも透き通った泉が見えてきた。

底まで見えそうな泉を覗き込むと……透けた先には見えるはずの底ではなく、なぜかこちらを覗きこんでいる顔が見える。あちらからはこちらが見えていないのか、真剣な瞳で泉を覗き込んでいる男はやけに見目麗しき顔をしている。女性的ではないものの、精悍な顔の中、瞳だけに苦渋を滲ませている男の年は、見たところ30代も半ばだろう。何事かを呟いているその唇は、女性であれば触れてみたいと思うほどだろう。……私を除いて。

今までの人生で、男というものに一切の期待を抱いていないせい、か、男性的な魅力が滴るほどの彼にも興味を持たず、ただ何をこんなに苦しそうなんだろうなと、のんきに思っていると、その疑問を呟いてしまったのか、回りの光がまたピッと光ると、今まで葉のざわめきしか聞こえなかった耳に、突然声が聞こえ始める。

『……なぜ、なにも変化がない』

低く、ぞくりとくるような声に自然と背が伸びる。唇の動きからして、こちらを覗きこんでいた男のものだとすぐに知れた。

『陣は光り、召喚は成されたはずですが……泉から、何も現れませ

んね……』

困惑したように呟くその声は、男の背後に立っている麗人から漏れた。

『陽の神と、月の神が並ぶ日に召喚を行えば、求める物が現れるのではなかったか？』

声を荒げてなどいないのに、ずしりと響く声には抑えきれない焦燥が滲んでいた。

何一つ動じることなどなさそうな目の前の男が、こうも焦りを露にしているのが意外で、ことりと首を傾げてしまう。

何となく、何となく、自分がこの泉に入ってしまったばいいのだろうとは判っているものの、目の前の二人はどうみてもお知り合いになりたくない存在で。

意識的に目を向けないようにはしているものの、精悍な男が身に纏っている装束は一般的とはいえないような豪華なもので、その後ろに立つ麗人もまた、シンプルでありながらも、生地良さが泉越しにでも伺えるものだった。

『……っ、召喚できねば、あの狂った竜はどうなる！！』

とうとう声を荒げた男が、苛立ったように泉に手を伸ばすと、波紋でゆらゆらと男の姿が歪む。

あ、ちよっと面白い。誰もが口を揃えて美形というだろう二人が変な顔になって、ついくすくすと笑ってしまう。こうしていながらも、実際目の前に二人がいたら、自分は能面のような表情になっってしまうだろうなあと自嘲しながら、少しでも情報を拾うために耳を澄ませる。

『最早あの竜から理性は失せた。召喚が失敗したのなら……手にかけるしかないのだろう！』

決してそれを望んでいないのだろう、男が初めてその表情を歪ませる。無意識にその頬に手を伸ばしそうになるが、はっとしたように己の胸元に手を戻す。

だめだだめだだめだ……下手な同情は身を滅ぼす元だ。冷静に、冷

静に…と己に言い聞かせているうちに、ようやく諦めたのか、泉の底から人の気配が失せ、何も無い空間だけが広がっていた。

「ん……？」

早く、早く、と言うように自分の周りでくるくる回っている光の一つに手を伸ばし、手のひらにのせる。

「あそこに行って欲しいの？」

そうそう、と上下にひよこひよこ動く。

（ああ……可愛い、もって帰りたい……）

そこまで考え、ようやく思う。ここはどこだ。

冷静なようで、実際はそうじゃなかったんだなあ……と自己分析しながらも、色々知ってそうな光に問いかける。

「ここは、私の世界じゃないよね？」

ひよこり、と上下。

「ちゃんと戻れるの？」

その言葉に、ほわほわ浮いていた光の全てが、ぴたりと動きを止める。悲しそうに光を弱め、申し訳なさそうに寄り集まり、こちらをじっと伺っている。

「無理……なのね？」

擦れた声で、真偽を問う。

ひよこり、と今度は元氣なく光が跳ねる。

「私を呼んだのは、あなた達……？」

再びひよこり。

「……そう……」

ぽつりと眩き沈黙すると、必死に誤ろうとしているのか、慰めようとしているのか、おずおずと近寄ってきてはそつと撫でてくる。

「そっか……」

暫く瞳を閉じて、心を落ち着ける。力尽きるまで泣き叫ぶ元氣もなくなっていたが、何よりも、戻れないことに喪失感を感じるものの、どこか安堵していたから。

「あなた達は、ずっと私の傍に居てくれるの……？」

歪んだ声で問いかけると、勿論だとばかりに必死にぴよこぴよこ跳ねる。

「なら、良いわ」

戻ったところで、私が大切に思う存在はどうに無い。父も母も失い、他人からは美しいと言われるこの姿故に友人も出来ず、ただ一人、自分を表面ではなく見てくれたと思った人は、別の女性の手を取った。淡々とただ、仕事をして、一人きりの部屋に帰り眠る。その繰り返し生活。暖かさを感じることも無く、楽しいと笑うこともなく、ただ生を消費するだけならば、何かの役に立てる場所で生きて行けば良い。ただ、一人は寂しい。見慣れた風景も、執着は無くとも馴染んだ場所もない世界で、ただ一人立ち続けるのは寂しすぎる。

だけど、ただひたすらに自分を愛しむようなこの光たちが傍にあるのなら、今こうしているように笑える気がする。ならば、良い。

第2話 漆黒の竜

しばらく黙りこんだまま考えていた自分を氣遣ってか、そっと寄り添っていた光を撫でる。まだ心配そうに伺っているそれらに優しい笑みを浮かべると、そっと立ち上がる。

見下ろした泉に移る部屋はもう、完全に閉じられてしまったのか、先ほどまでは残っていた灯りさえ消されていた。

「竜に、会えば良いのね」

先ほどの二人の会話から、自分が竜のために呼ばれたことは理解できていた。ちよっと迷うようにしながらも、ひよこり、と跳ねた光に、なら案内して？と告げ、躊躇無く泉に身を躍らせる。

濡れてしまうのかと思えば、先ほど闇の中を下降していたように、ゆっくりと何も無い空間を落ちてゆく。だが傍には同じく銀色の光たち。笑みさえ浮かべてそのまま沈んで行くと……ひとり、と今度は冷たい床の感触。

暗い室内を、銀色の光で見渡せば、そこは神殿のようだった。温かみの感じられない石造りの建物の中、光に導かれるように歩を進める。

部屋にいたところを呼び出されたせいで、足の先から冷たさを感じる。ぶると身を震わせると、ほわりと銀色の光に包まれ、柔らかな暖かさを感じる。

「有難う」

笑みに喜ぶように、身を包む光がさらに暖かくなる。正直な反応に微笑みながら、竜の元へと告げると、光が困惑したように明滅する。

「ん？もしかしてさっきの二人に会って欲しいとか？」

おずおずとうなずくように、自分を包む光が上下する。

「でもねえ……お近づきになりたいくないのよね……」

厄介ごとの気配しかないのだ。自分が竜のために呼ばれたのな

ら、その竜にだけ会って、どこかではひっそりこの子達と暮らしたいのだ。有難いことに言葉が理解できるのは先ほどの件で知っている。言葉さえ通じるのなら、あとは何とかできるだろう。

「用件だけ済ませてさっさと去っちゃダメ……？」

お願い、と告げると、どうしよう、どうしようと光がふわりと離れ、うろうろと彷徨う。

「竜にだけ会って、私が出来ることをしたら……あなた達だけとひっそり生きたいんだけど……」

願望を口にする、ピツと嬉しそうな気配が辺りを取り巻く。本来ならあの二人に会わないといけないのだろう、少し迷う動きはするものの、私の提案が嬉しいのか、ご機嫌にピンクに色を染めたりしながら、ふわんふわん動く。

（うう……可愛い）

どうしてこうまで好かれているのかは謎だが、一切の悪意を感じないこの子達と居るほうが絶対自分のためだ。というか自分の幸せだ。可愛いこの子達と戯れながら、少しずつこの世界を知って、生活して行く。竜などというファンタジーな生物もいるようだが、人間もいるなら町もあるだろう。言葉さえ通じれば、どうにかしてみせる。

生きるためなら何一つ良いことを運んでくれなかったこの容姿さえ利用する事に躊躇いはない。か弱い女性が涙ながらに頼めば、職を与えてくれる優しい人もいるだろう。などと、本当にか弱い女性なら思わない思考を廻らせ、もういちど畳み掛ける。

「私が欲しいのは平穏と、あなた達だけなんだけど……」

じっと光を見詰めていると、ふるふると震え始め、ほわりと薄紅色に染まり、ぽとりと床に落ちる。慌てたように掬い上げると、ぱつと浮かび上がり、やけに必死に上下にぴよこぴよこ動く。

（こ、これは了承してくれたのか、な……？）

今度はさあ行こう、早く行こうとばかりに光が先へ先へと促してくる。それどころか部屋から出て、長い回廊を歩いている間に人の

気配を感じて柱の影に身を寄せると、隠すように光が覆う。何度か人をやり過ごすうちに、光が隠してくれていると気付かれないのだと悟り、柱に身を隠すことなく光で全身を覆ったまま歩き出す。

一つだけ案内をするように光っている子は、先ほど床に落ちた子なんだろうなあと、気配で目が合うたびにほわりと薄紅に染まることでわかってしまう。

安心すると、回りを見渡す余裕ができてきて、すれ違う人々の姿をじっくり観察してしまう。

メイドのような姿をした女性達があちこちで働いており、制服をかつちり着こなした男性が一定感覚でいる。彼らは腰に剣を佩いて、護衛のようなものだと感じた。全体的に意匠は中世と中華を足して割ったような感じで、建物ももちろんだが、ここが違う世界なんだなと肌で感じる。

自分は異質なもののだと痛感し、歩みを止めてしまうが：身を包む暖かさに、一人であっても、独りじゃないことを思い出し、顔を上げる。

再び歩み始めたその時、すぐ近くの扉が開き、先ほど泉越しに見た男が硬い表情で出てくる。そのまま足早にどこかへ向かおうとしていたのに、何故か自分のすぐ傍で立ち止まり、不審そうに此方に目を凝らす。

「……」

「……」

互いに沈黙しながらも、だうらだうらとこちらは背筋を冷たい汗が伝う。蛇に睨まれた蛙のようにただ見上げるしかないまま息を詰める。

こうして傍で見ると、見上げていると首が痛いほどに男の背は高く、鍛えられた引き締まった身体なのが衣服の上からでも見てとれる。

じっと見詰めてくる薄茶の瞳は力強く、本当はこちらが見えてい

るんじゃないかと思うほどだった。視線がカチリと会うと、男が口を開こうとして……背後の扉の音に遮られる。

「陛下！！お待ち下さい！！」

先ほどもいた細身の青年が目の前に呼びかける。

（陛下……陛下……やっぱり厄介ごとにしかならない）

男を前にしてから少し迷うような気配をしていた光を、陛下と呼ばれた男が背後の青年に意識を取られた瞬間を狙い、さっさこの場を過ぎ去るように促す。

何とか二人に近づかないように、壁際をじりじりと進み、通り過ぎると安堵のあまり小さく息をつく。すると、ヒュッ！と風を切る音と同時に、すぐ傍の壁に銀色の塊が突き刺さる。

ギ、ギ、ギ、とさび付いたように後ろを振り向くと、黒尽くめの男がいかにも何かを投げましたとばかりの姿でこちらを見据えていた。

見えているわけではないのか、先ほどの陛下らしき人物と同じように訝しむような表情をしている。

困惑したような青年とは違い、陛下と黒衣の人物はまっすぐにこちらを見据えている。首を元に戻すと、目の前には見事な短剣。これが自分に投げられたのだと理解すると同時にへたりと腰が抜けそうになる。震える足を、意思の力だけで繋ぎとめ、何かを感じ取っているのか、近寄ってこようとする陛下と黒服から逃げ出そうと全力疾走する。

慌てたように光が必死に先導するのを追い越さん勢いで駆け抜けると、突然光が動きを止める。肩を上下させ、必死に息を整えながら顔を上げると、そこにはあまりにも巨大な扉が存在していた。

どう見ても自分には開けそうにないそのサイズの扉に途方に暮れ、そつと手で触れる。

「う、そ……」

ギシリ、と音を軋ませながら扉がゆっくりと開いてゆく。大の男が数人がかりでもびくともしなさそうなその扉は羽より軽く、目の

前で開かれてゆく。

扉が開かれるとともに目に入り込んできたのは漆黒の壁。艶やかに光を弾くその滑らかな壁の先を辿るように視線を滑らせると、あまりにも高い天井と、その天井近くにある真紅の宝玉が目に入る。

「竜……？」

絵本の中でしか見たことのないその姿。恐怖に意識を失ってもおかしくはないその巨体。今日にしている赤い二つの光は狂気を帯びていた。それなのに、自然と足が引き寄せられる。

誰がどう見ても恐ろしいはずの存在なのに、惹かれてやまない。

ただ早く抱き締めてあげないといけないと逸る心のままに駆け出す。

『グオオオオオオオオオオ！！！！』

全身に響くような轟音。それが目の前の竜の叫び。恐怖を煽るはずのその声は哀しく響き、とても聞いていられない。

「私を！！傍に！！」

その言葉だけで意を酌んだ光に包まれ、猛る竜の目の前に浮かびあがる。目の前の獲物に喰らいつこうと鋭い牙を見せた竜の鼻先に、そっと触れる。

思いもかけぬ感触に動じたのか、グ：と唸り声を上げ、硬直した竜に身を添わせる。そのままそっと鼻先を撫でていたら、ぐり、と腹に鼻先を押し付けられる。甘えるようにぐりぐりと擦り付けてくるその姿に、自然と笑みが浮かぶ。

「こら、くすぐりたいよ」

甘やかすようなその声に、さらに満足そうに鼻先を押し付けてくる。先ほどまで細くなっていた瞳孔は大きく開かれ、狂気を宿していたはずが穏やかな光を湛えている。

ひよい、と大きな鉤爪のついた手に乗せられても危機感など感じない。手のひらにのせたまま鼻先だけでなく顔をすりすりと寄せて甘えてくるのに、苦笑しながら手の届く限りに優しく撫でる。心地よいのか時折目を細めては喉を鳴らす姿に愛しさを募らせていると、

ようやく落ち着いたのか、竜が鼻先をすこし離す。じつと見詰められているのに、居心地の悪さなど感じず、同じように見詰め返していると、突然に脳内に低い男の声が響く。

《我に、名を》

どこか聞き覚えのある声で告げられたその内容に、疑問を抱かず、まるで用意された名前を辿るように口にする。

「バルドル」

《其方の名は》

「スイ……青木、翠」

応えた瞬間、二人を包むように風が渦を巻く。石造りの室内が破壊されるほどの力なのに、翠にはそよ風一つ吹かない。

《契約は、完了した。スイ……我が、花嫁》

第3話 竜と花嫁

「花……嫁……？」

《是》

耳にした言葉を理解できない。聞き間違えかと問いかけると肯定される。呆然としたまま目の前の巨大な竜を見詰めていると、取り巻く光たちが喜びの気配を放つ。

「私が、バルドルの、花嫁？」

どうか否定してと懇願じみた声で今度は光に問いかけるも、腹立たしいほどに元気にひよこひよこ飛び跳ねる。頭痛を堪えるように、険しい顔で黙り込んでいると、不意に目の前の竜がしおしおと項垂れる。

《嫌か……？》

あまりの消沈振りにすぐさま頷くことなどできず、口元が引き攣る。嫌だ。素直にそう告げてしまえばこの竜はどうなってしまおうのだろうか。

《だが、すでに其方そなたは我が竜珠だ……》

「竜珠？」

聞きなれない単語に、翠が問いかけると、項垂れたまま、小さく頷く。

《我に名を与え、そなたの真名を告げた。これにて契約は完遂される》

「知らなかった……」

呆然と呟く翠に、逆に不思議そうにバルドルが問いかける。

《聞いて居らなんだか？ ジークハルトより》

「それ、誰？」

《……》

「……」

沈黙が重い。心なしか回りの光たちが今度は元気が無い。

《何故、ジークハルトを知らぬのだ。我が竜珠だというに》

《ごめんなさい、スイが会いたくなさそうだったから。それに、僕達とだけずっと居たいって言ってもらえて嬉しくて……つい隠しちやった》

低く重々しいバルドルの声とは違い、幼く高い声が答える。他にも誰かこの空間に居たのかと辺りを見回すが、ほかに影は無く……だが、バルドルの鼻先に光が一つ謝罪するようにしゅんぼりと光っていた。

《なら、スイは我が半身と出会わぬままにここに辿り着けたというのか？》

《僕らが連れて来たんだ。ジークハルト様とは途中出会ったけど……隠してた時だったから……》

さらに光が小さくなる。このまま消えてしまふんじゃないかとばかりに小さくなり、ただ二人？の話を聞いていただけの翠が慌てて間に入る。

「バルドル、この子達は悪くないの。私が他の人に会いたくないって望んだから、隠してくれてただけ。ちゃんとジークハルトさん達にだと思っけど、私を会わせようとしたのに、それを嫌がったのは私のほうなの」

光を両手で掬い上げ、翠はじっとバルドルと瞳を合わせる。嘘偽りなど無いことを伝えるように。

「私が現れた泉の向こうでの会話を聞いてたから、貴方に会わないといけない事だけは判っていたから、すぐここに来たの」

《泉……？泉の向こうということは、其方は召喚されし者なのか？》

「たぶん、そう。ここは私の生きていた世界じゃないから……」

小さな声でそう告げると、慰めるようにバルドルが鼻先を寄せてくる。その心遣いが伝わり、翠がくすぐったそうに笑むと、さらにぺろりと長い舌を伸ばし、翠の頬を舐める。

「くすぐったい……ん、大丈夫だよ。この子達も、貴方も優しいから、寂しく感じる暇もないよ。……残してきた人がいたら、違

「ったんだらうけどね」

くすくすと笑っていた翠が、どこか遠い目をして告げると、バルドルが翠の頬からそっと離れる。

《其方はこの世界が娘。故に彼の^か世界では縁^{えにし}を繋ぐ事が出来なかったのだらうよ》

「え……？」

《ジークハルトと出会ってないのであれば、何も聞いては居らぬのだらう。我と契約するまではその小さき物達の声も聞こえなんだろうしな》

困惑したように見上げる翠を落ち着かせるように、その柔らかな頬を再び舐め上げ、バルドルは手のひらに翠を乗せたままに、居住まいを整える。

《ならば、我から話そう。この世界と、我と、其方について——》

第4話 リインデイル

リインデイル……そこは、竜が統べし国。国を治めるは、竜と共に生まれし者。竜を得る者はただ一人。その資格は血筋ではなく純粹なる力。竜王の力弱まりし時、次代の竜王が竜の卵を抱き生まれてくる。貴族も平民もそこには無く、生まれし竜王に皆跪く。それが唯一の王故に。

竜王とその竜は二つで一つ。魂を人と獣の姿に分かたれし存在。人でいながら空を駆ける感覚を知り、竜でいながら大地を踏みしめる感覚を知る。だからこそ、不安定な存在でもあるのだ。

竜王が自我を持つ頃には、先の竜王の姿は無く。この世に己と同じ存在は誰一人居ない。傳かれ、崇められようとも、その孤独を理解できるものは無く、竜王と竜——二人は孤独に縛られる。

その唯一の救いが竜の掌中の珠、竜珠。二人の孤独を癒す唯一の存在。竜王には人が与えた名が。だが竜に名を与えることの適う同属は存在せず、その竜珠のみが名付けを行える。名を持たぬ竜はただの獣。成長するにつれ身の内より溢れ出る力の制御適わず、しだいに理性を本能に食い破られてゆく。

名を与えられる事叶えば、理性を取り戻し竜王の半身としてその力を振るう。

竜珠は、竜王と竜に分かたれている魂とただ一つ寄り添える存在。触れ合ってしまったえば自然と惹かれ合う存在。二人の孤独を受け止め、癒し、幸福を与える存在。その形は問わない。母のように包み込む愛を与える者、恋人のように添い遂げる者、幼子のように慕う者、常に傍に控え護る者。

唯一変わらぬ事は、竜に名を与え、その魂を救いし事。

「その竜珠が…私？」

《是》

一つ一つ、己の理解の及ばない物語のような説明に質問を投げてゆく。そうして知識を得てもなお、理解できないことがあった。

「何故、私なの」

《其方が其方であるから。それ以外に無い。その姿も、その魂も。

其方の存在全てが【そう】なのだ、我には理解^{わか}る》

「間違いなんてことは……」

《有り得ぬ。竜珠以外が名付ける事は不可能。さらにその身に寄り添う小さき物——大地の心。其方に判りやすい言葉に例えれば精霊のようなものだろう。それらが寄り添うは竜珠以外には無い》

間違いだったら良いなんて、もう受け入れる他無いと知りつつ足掻いてみても、バルドルに一蹴されてしまう。翠が一気に詰め込んだ知識とその内容に疲れ果てたように溜息を吐くと、途端に焦ったようにバルドルの尻尾が左右に揺れる。

《長く語りすぎて疲れてしもうたか》

言葉と声は重々しいのに、その姿はあまりにも愛らしい。言葉で表すなら、あわあわとしか言いようのないバルドルに、翠は大丈夫だとそっとその鼻先に触れる。当たり前のようにざりとした舌で舐めてくるバルドルに今度は鼻先を押し退けながら自然と笑いが込み上げてくる。

（バルドルの支えになるのなら——良いか）

竜にとって唯一の存在であるのなら、手放されることはない。その約束が嬉しい。何一つ足場の無いこの世界で、頼れるものは光…精霊たちだけだった翠にとって、揺るがない存在ほど有難いものはなかった。だが、そこまで考え——矛盾していることがあるのに気付く。

「あれ？でも竜珠って……恋人でなくても良さそうなのに、何で花嫁？」

《……………》

「……………バルドル？」

途端に黙り込んだバルドルに、言い逃れは許さないとばかりに翠は語尾を強める。

《我に名を、与えるだけで竜珠としては良いのだ。だが……》

そこで言い洩るバルドルに、にっこりと満面の笑みを向けると、判り難いはずの竜の表情が引き攣る。

「バ・ル・ド・ル？」

《……名を、ただの名ではなく、真名を相手に捧げ合うという行為が、婚姻の儀となるのだ》

「真名……？」

《我の声が聞こえるのは、其方と我が半身のみ。それ故に我が真名を知る者はいない。だが人間にとっては生まれし時に与えられた真の名……真名と、名乗るための名とがある。そして、その互いの真名を交換することで、真名を縛り契約と成すのだ。例えば……ジークハルトの名を知るものは我と其方のみ。皆はそう、ジークと呼んでいたはずだ》

「その契約って、他者から教えられた場合には成立するの？」

先ほど、バルドルはジークハルトと己は同一の存在だと言っていた。ならばジークハルトはすでに己の名を知っていて、翠もまたジークハルトの名バルドルより知っていることになる。これは互いの名を交わしたことになるのではないだろうか。

《否。契約は互いの口から名乗ることにより成される。ジークハルトはすでに其方の名を我を通して知っている。其方もまた我を通してジークハルトの名を知っている。だがこれでは契約にはならぬ》

「よかった……」

安堵のあまり、バルドルの手の平に座り込んでしまう。どこか困惑したように翠を見下ろしながらバルドルはおずおずと口を開く。

《其方は……我が半身を厭うのか……？》

幕間 半身 Side ジーク

「……っ!!」

「どうなされました、陛下」

いつものように、淡々と政務をこなしていたはずのジークハルトが何の前触れも無く息を呑む。滅多に感情を露にすることのない竜王の、いつにない行為に傍らに控える青年が問いかける。

「……召喚は、成功したと言ったな。セルジオ」

低く唸る様な声で問うジークハルトに、セルジオもまた沈痛な面持ちで頷く。

「はい、確かに。召喚の証として陣が確かに輝きました。ですが……結果は」

己の力不足を嘆くように、セルジオが秀麗な眉を顰め、視線を落とす。

「成功したようだ」

「……陛下、何と？」

「成功したと言ったのだ」

発言とは裏腹に、瞳を刺々しく光らせ、ジークハルトは困惑するセルジオを見据える。

「ですが、あの泉からは誰も現れなかったではないですか！」

普段の冷静さをかなぐり捨て、叫ぶように返すセルジオに、ジークハルトはただ頷く。

「今、我が半身と竜珠の姫が契約を成した」

「……………」

主の信じ難い発言に、セルジオが己の動揺を振り払うように緩く頭を振る。幾度か深い呼吸を繰り返し、現状を把握しようと思いを巡らせる。

「どうやって竜珠の姫は……竜の御許に辿り着けたのでしょうか……」

今代の姫は今までとは違っていた。

本来であれば、竜珠は竜王の傍近くに生まれ出^いずるはずの存在だった。そして導かれるように物心つく頃には竜王と出会い、その心の安寧を保つ。それを違えたことなど過去の文献にも記されていない。

だが、ジークハルトは竜珠を持たぬ唯一人の竜王であった。

どれほど竜の背に乗り世界を駆けようと、傍にあれば必ず気付くはずの竜珠の気配を辿れなかったのだ。この世界に己の唯一の存在が無いと知った瞬間の絶望は、未だに胸の中を巣食っている。

竜もまた、時間の経過と共に自我を暴走させ、本能のままに暴れ始めたのだった。……竜珠に名を与えてもらわねばその心は全^{まった}き形を成し得ず、獣の性のままに生きる。

半身たる竜王でさえその制御は完全とは成らず……世に並ぶ力を持つものなどない竜の狂気は懸念を産み、抑えが効くうちにと消滅を願う声さえ上がった。

己の半身を自身で葬るなど、自殺にも等しい。ただでさえ竜珠を持たぬままでは不完全だというのに、さらに残った魂を^もぎ取るなど、有り得ない行為だった。だがこのままでは竜王でさえ竜を抑えきれなくなりそうだった。日に日に竜の瞳からは知性の光が失せ、細めた瞳孔には爛々とした殺意と破壊衝動、さらには飢餓感まで浮かべ始め——このままでは、世に甚大な被害を及ぼす事は誰もが理解していた。

だが、この世の唯一の王。代わりなど存在し得ぬ竜を殺す決断など、誰も出来なかったのだ。竜を欠いた竜王など居ない。分かれたる事のないその魂は二つで一つ。一方が生を終えるとき、もう一方もまたその後を追うように衰弱して行くのだ。

いっそのこと、新たな竜王でも生まれるのであれば、ジークハルトは己を屠る行為だと知りながらも、その剣を振るうつもりであっ

た。だが一向にそのような報は届けられず、ただじりじりと竜が狂気で狂う様を見ているしかできなかったのだ。

此度の召喚が、最初で最後の機会。月の神と陽の神が一直線に並ぶその日、生涯に一度だけ己の欲するものを呼び寄せる術^{すべ}。城の書物を全て漁り、夢幻^{ゆめまぼろし}の如き伝承にさえ縋った。

それが失敗に終わった時、ジークハルトは意を決した。

竜王が不在の世界がどのように歪むのかは何者も知り得ない。だが目の前の災厄を放ってしまえば世界がどうなるのかは火を見るよりあきらかだった。己の民と臣下を信じ、ジークハルトは半身を手掛ける事を決意し、この数日少しでも被害を小さく収めようと不眠不休で執務に励んでいたのだ。

(なのに、何故……)

竜珠を得、半身の魂が歪められなかった事への安堵はある。半身を屠らなくてすむことへの感謝も抱いた。だが、それと同じくらいの強さで息が出来ぬほどに苦しい。

「我が許には現れず……半身の許へと出向いたようだ。——光の導きによって」

「竜珠の姫の傍近く^あに在るという、光珠^{こうじゆ}です、か……。ですが、光珠は竜に名を与えねば、意思の疎通は図れないはずでは……」

本来であれば、竜珠はまず竜王と出逢い、魂を触れ合わせ互いを認識する。そうして後、竜と出逢い名を与えるのが常であった。ましてや此度は界^{かい}を渡っての召喚だ。この世界の事など何一つ知りえぬ竜珠は、ジークハルトの許に召喚^よばれながらも目の前に現れようとはしなかったのだ。

痛むほどに噛み締めた奥歯の軋む音しかジークハルトには聞こえない。目の前で思考の海に沈むセルジオの呟きなど耳を通ることさえしなかった。胸を焼き尽くすのは激情。半身から伝わる歓喜を感じれば感じるほどに込み上げる妬心。彼女の姿どころか、その名さ

え竜を通じてようやく知りえたという現実が、ジークハルトを苛む。
(何故だ……何故我を拒む、翠………)

幕間 重き扉 Sideジーク

「……我が竜の許へ向かう」

魂を同じくする半身と言えど、全てが伝わるわけではない。だが、今こうしている間にも沸々と湧き上がる歓喜の念。己が心と相反するその感情は、竜の身を持つ半身の感情が自然と伝わってきているものだ。ならば——竜の傍には翠の姿が必ず在る。

立ち上がりその見事な体軀を現し、ジークハルトは重厚な扉を潜る。するとすぐに、扉脇に控えていた護衛が背後に付き従う。全身を漆黒の装束に包み、見目より実を取った無骨な剣を携えた男に、ジークハルトは先を見据えたまま指示を飛ばす。

「ガイ……先の回廊の件、調査は不要だ」

「はい」

ジークハルトの言葉に何一つ言及せず、頷く。ガイと呼ばれた男は主の後を追いながら、近場にいた部下へと調査の中止を端的に伝える。これで要所に控える者たちにより、素早く末端まで意は伝わる。

剣呑な気配を放つ竜王は、常の諦観をどこかへ置き忘れた風情で、足早に求める場所へと向かってゆく。長い回廊を抜け、城の北端に存在するはただ一つ。——竜癒の間。

今となつては狂った竜を捕らえる檻と変わり果ててはいるが、そこは元来、怪我を負った竜が癒しを得るための場所だった。竜が入る事を考えて作られた他の場所よりも高い天井、厚い壁。その扉は部屋の主たる竜と、その半身たる竜王……そして、竜珠にのみ許された場所。それ以外の者が扉を開こうとすれば、大の男が数人がかりで行かねばならないほどであった。

怪我の痛みに竜が暴れても問題のないように、人気のない場所へと置かれたその部屋への唯一の回廊をジークハルトは進み続ける。

しだいに警邏する者の姿も消え、回廊にはジークハルトとガイの靴音のみがやけに大きく響き渡る。

「……………」

人のために誂えられた物ではない事が一目で判る扉の前に、言葉に出来ぬ思いを抱えジークハルトは立つ。

この扉の中には、長い年月希求していた我が竜珠が在るのだろう。未だその姿さえ掴めぬその存在。だが姿などジークハルトの前では意味を持たない。

竜珠の姫を求めるは竜王と竜の本能。この世界の誰一人代わりのいない存在。魂がこの者でなければ駄目なのだと咆哮をあげる。

(この中に……)

半身と竜珠が真名を交わし契約を成した瞬間、浮かびあがった名。涼やかな異国の響きを帯びたその名の主が、今この扉の向こうにいる。名付けだけではなく、婚姻の儀を行った半身——バルドルと名づけられた竜には、翠の存在がどれほど離れていようとも理解できるだろうに、ジークハルトにはそれが適わない。その現実に歯噛みする。

(召喚が成功すれば、誰よりも先に見え——我が真名を与え、竜珠の姫が竜にするように、異界生まれ故に一つの名しか持たぬであろう姫に新たな名を与え……二度とその存在を失わぬよう、互いの真名を交わすはずであったのに——)

幼き頃より傍近くあれば、親愛や友愛。他の形の情を築きあげることもできたはずだが、此度の竜珠の不在。

歴代の竜王とは違い、不安と焦燥、自身と竜を苛み続けた孤独に、尋常ではなく竜珠を渴望したジークハルトにとって……穏やかな情愛。その程度のものでは飢えは満たせなかった。

恋人として、伴侶として。魂だけではなくその身をも深く繋ぎ、誰よりも己の傍近く在る存在としなければ、耐えられそうになかつ

た。

（だからこそ、この世に竜珠の姫が現れたら、誰よりも先に抱き締め、これは現実なのだ……これよりこの腕の中が其方の居場所なのだ、告げようと……）

生涯に一度だけ使える術。己の魂を賭けて求めるものをその者の許へと誘う術。求める心に僅かにも乱れがあれば、世界をも渡る力が術者に襲い掛かる。それほど危険を冒してまでも焦がれ、求めた存在。それが遂に今、すぐ手の届く場所に在る。

彼の者はどのような姿なのだろうか……我が姿を見て、どのような表情を浮かべるのか……そして、何故、我が前に姿を見せなかったのか。何故……我では無く、竜身たる半身と婚姻の儀を交わしたのか——。

何故、何故、何故。

翠に問いかけたい言葉が胸で渦を巻く。交わしたい言葉が尽きることなく湧き出てくる。逸る心を微かな理性で抑え付け、ジークハルトは扉に手をかけた——

第5話 竜珠と光珠

「まずは……衣食住よね」

あの城の中に居れば、どれ一つ困る事は無いだろうけど、翠にその選択肢は無かった。

光珠を身に纏い、姿を隠したままに扉から出た翠は、長い回廊の先から響く足音に、反射的に背を背け、回廊に取り付けられている窓から身を翻しその姿を眩ませた。

見知らぬ形でありながらも、美しい様式をみせる庭園に時折見蕩れながら、どれくらい続くのかわからないほど広大な庭をすり抜けて行く。本当なら、この世界の衣服をこっそり借りてしまおうかと思いはしたものの、断りも無く借りる事への抵抗感と。何より――置いてある場所がわからなかったのだ。

言葉が通じるようになったとはいえ、精霊のような存在の光珠にとって、城事情など興味も無いわけで。かといってそこらを歩いている人を昏倒させて服を奪うには翠の良識が邪魔をする。

諦めて城の外へと出ようとしてみれば……今度は光珠は良い水先案内となった。方向もわからない翠の前を、もはや役割となってしまうのか見慣れた大きさの光珠がほわほわと楽しそうに漂う。

「あなた達に名前は無いの？」

可愛らしい姿に微笑みながら、人気が無くなったのを見て、翠は問いかける。

《ないよ。僕達は僕達だよ。光珠っていうのも、いつの間にか呼ばれてたんだ》

当たり前のように、くると翠の周りで戯れながら告げる光を、翠は指先でつん、とつつく。

「なら、私がつけてもいい？」

《スイが名前つけてくれるの？僕達に？》

驚いたのか、翠の周囲に張り付いていた光の一部までもが離れ、ぴよこぴよこと慌しく光りはじめる。

「そう、これからもずっと傍にいるんだから、やっぱり名前を呼びたいし……駄目かな？」

光珠、そう呼ぶのはまるでバルドルだったら竜。翠だったら人間。そう呼んでいるようで嫌だったのだ。

首を傾げて問いかけながらも、どこか不安そうな翠に、光珠が慌ててわらわらと翠に纏わり付く。

《違う、驚いただけ！嬉しい、嬉しい、嬉しい》

誤解されたくなくて、必死に喜びを表しながらも、光珠は忙しなくその色を薄紅と銀色、交互に変えてゆく。名前もだが、何より翠がこれからもずっと傍にいてくれると言ってくれたのが嬉しい光珠だった。

竜珠の傍にはいつでも光珠があった。数だけはあるものの、一つ一つは小さく、その力は寄り集まっても大して強くない。竜珠の姿を隠したり、その身をほんのちよつとだけ移動させたり。竜珠が居ないときはただ辺りを彷徨うだけの存在でしかない光珠にとって、精一杯頑張っても、ほんの一瞬痺れさせるくらいの力しか持たないのだ。

だけど、光珠は竜珠に惹かれる存在。性格や姿は様々でも、どの竜珠も、その魂だけは澄みきっていた。人の入れぬ光珠の世界。その中心に位置する泉。その泉の水のようにどこまでも透明な魂。その心地よさに自然と引き寄せられてしまうのだ。

今までの竜珠は、幼い頃から光珠がいるのが当たり前で、その存在があるのは息をするのと同じ、当たり前前のものだった。そして……空気のように、語りかけてくる者は少なかった。ただ傍で、いつも楽しそうに光っている存在とでも理解していたのだろう。

翠は、声を掛けてくれた。ずっと傍にいようと言ってくれた。自分達を望んでくれた。まるで、竜に与えた時のように——名前を、くれると言ってくれた。

嬉しくて、嬉しくて。光珠は幸せに全身を染めながら翠を取り巻く。

「コウ——って、どう？」

私のいた世界で、光ってコウとも読むのよ。安直だけどね、とそう言ってまた微笑む翠に、光珠は、また薄紅に染まる。

そんな会話を繰り返しているうちに、庭園にも終わりがやってきた。少しずつ感じる人の気配。口を噤み、今まで以上に人で賑わう回廊沿いに進むと、巨大な壁が立ち塞がる。ぐるりと周囲を囲む壁の一部に取り付けられた扉には、銀色の甲冑を身に纏い、扉を護る者たちと、通行証らしきものを確認してもらい、城へ出入りする人々の姿があった。

今まで以上に慎重に、人に触れないように注意しながら、翠はその城門を潜り抜ける。

『我が半身を厭うのか』——その言葉を否定できなかった、重い心と共に——

第6話 過去

《其方は……我が半身を厭うのか……？》

困惑も露に問いかけたバルドルの問いが、今でも頭を離れない。厭うほどにバルドルの半身の事など知らない。けれど……泉越しに出会った男。一度擦れ違った時に、陛下と呼ばれていた男。あの存在が、竜王と呼ばれるものなのだと、とうに理解していた。

苦しそうな表情を見ると、大丈夫だよと頬を撫で、抱き締めたいと自然に思った。耳に響く声は……低く、心地良く。傍でいつまでも聞いていたいほどだった。

（だけど……厄介ごとは、お断りしたいのよね）

唯一無二の存在？竜王陛下？誰もが膝を折る？それだけでも面倒そうだが——翠が一番厄介に感じているのは、己の心だった。

危険な空気を感じるのだ。全身で自分に好意を向けてくるバルドル。騙まし討ちのように真名を交わし、婚姻の契約をしてきたバルドル。そのバルドルの半身……。

（捕まったら、逃がしてもらえない）

ぞくぞくと背筋を寒気が走る。最早これは生存本能に近いものだった。さらにそれはもう一つの事柄も理解していた。

「そして……捕まったら、私自身——逃げ出せない……」

最初に抵抗なく受け入れることのできたのは、コウ達だった。見知らぬはずの存在なのに、ただ可愛らしい、愛しいと心から思えた。そして、バルドルと出逢い——相手は恐ろしいほど大きな竜だというのに……恐れではないもので心の奥底が震えた。

頭ではなく、心で。この存在が自分にとって、とても大切なもの

だと全身で感じた。

——— だけど、それを素直に受け入れられたのは……… 彼らが人では無かったからかもしれない。

今まで、翠が心を傾けた人達は皆、翠の手をすり抜けていった。優しいかった父母は幼い頃に亡くなり、泣きじゃくり、暴れる翠をそっと抱き締めてくれた祖母も、高校の卒業を待たず失った。

あまり会話の無かったとはいえ、最後の肉親であった祖父も——
翠の成人を待たず、この世を去った。

一番心を許せる家族を次々と失い、失う事に慣れてしまった。
孤独な生活は、一人で笑う事もなく…… 普段表情を動かさないせいか、たまに浮かべた笑顔さえ、どこかぎこちなくなってしまうた。

そんな翠の手を取ってくれた人がいた。上手く笑顔を返せない翠を受け入れてくれ、寂しさを埋めるように傍に寄り添おうとしてくれた。

拒絶を繰り返す翠に呆れる事無く傍にいてくれるその人に、少しずつ、少しずつ。頑なだった翠の心が解きほぐされていこうとした時、前に付き合っていた彼女という人物が二人の間に立ちはだかった。

最初は、困ったような顔をしていた彼の心が、泣きじゃくる少女の姿を前にゆっくりと離れて行くのを、翠はただ見ている事しかできなかったから。

手を伸ばして、捕まえて、その先は———？

自分はまた、手にした大切な人を失ってしまうのかもしれない。
自分が相手を好きであればあるほど早く、その存在は翠の前から消えていった。だから、離れようとするその手を掴むことに怯えてしまった。

離れようとするその手を掴み、引き戻してしまえば父母のように、

その存在ごと失ってしまうかもしれないから――

こちらの世界の存在するべきだったから、元の世界では深い絆を繋ぐことができなかった――だから、今は繋ぐことができるのだとバルドルに言外に告げられようとも、そうですかとすぐに受け入れられるわけがない。

自分が大切に思えば思うほど、その人たちは自分から離れていった。その思いは翠の中から容易く拭う事などできはしない。

だけど、それがヒトでなければ――？

独りは、寂しい。独りは、辛い。言葉にしてみれば至極単純なそれは、底知れない不安を翠に齎^{もたら}していた。これ以上、失いたくない。ならば、失うことの無い存在が欲しい。そんな、ありえない存在が、どうぞとばかりに目の前に差し出された。

欲張って何もかもを手にしてしまっても、自分の小さな腕では抱えきれない。ならば、ほんの僅かな存在を大切に、大切に、全身で愛そう。

コウとバルドルとの出逢いを果たし、翠はもう十分すぎると思っていた。

（だから――面倒なことになる前に、逃げる）

竜王。バルドルとその魂を分け合う存在。けれど翠にとってはジークハルトは人間にしか見えない。ヒトであれば……失ってしまうかもしれない。だから、大切だと自分が思ってしまう前に、その前から姿を消してしまおう。

バルドルと同じ魂を持つのなら、きっと私は一瞬で惹かれてしまう――。

そうになったら、失う恐怖を何時までも抱え、傍にいることになる。

臆病な自分を嫌というほど自覚している翠は、そんな厄介な己の心を抱えることなど出来はしないと、きちんと出会ったこともない存在を求める自分の心に鍵をかける。

今でも鮮明に思い出せるジークハルトの顔を振り払いながら、翠はしだいに遠ざかる城門に別れを告げた。

第7話 見慣れぬ町並み

目の前に広がる、真っ直ぐな路。みち

広く、平たく整備されたそれを見て、翠はこの国の豊かさを初めて実感した。

主要な通りが整備されている事は多々あれど、左右に走る細い路地にさえ平らな石畳で覆われ、石が剥げていたりしている様子は少ない。

町並みにも統一感があった。頂に赤い煉瓦。窓にはめ込まれた装飾は艶やかな黒。細工は精緻せいちなものから簡易なものまで幅広くあれど、遠くから見て受ける印象は似通っていた。

その国の文化や好みもあるだろうか、見事なまでに整然とした町並みは数十年で作られられたものでは無い事くらい、翠にも理解できる。

「豊かね……」

周りを飛び交う活気溢れる声には暗さがなく、弾けるような明るさを持っていた。その声に背を押されるように呟く翠に、光珠は嬉しそうに跳ねる。

《よその国みたいなのに、争いなんてないから、皆元気なんだ！》

「争いがないってどういうこと？」

《だって、竜王も竜も、他にはいないから、争っていちばんを奪いあう必要なんてないんだよ》

「ああ……そういうことね」

身内同士の争い。他国からの干渉を除けば一番の敵は身内だろう。だけど、竜王となれる存在が1人しかいないのなら……それが血縁を必要としないのなら、争いは格段に減るだろう。

さらに、この世界において竜を超える生物など、居ないのではないだろうか——逆らう者など無いほどに。

《スイ、スイ！ いっぱい人いるところに着いたよ》

町並みを眺めながら歩を進めていた翠は、光珠の声に意識を引き戻される。はっとしたように辺りを見渡すと、一際賑わう一角に辿り着いていた。

自分が求めていた場所だと、翠は小さく頷き近くの路地を奥へ奥へと進んで行く。大通りの喧騒は届くものの、一目が途絶えた瞬間に、翠は身に馴染んでいた光珠の覆いを散らす。

人目を引くのは避けたいけれど、姿を現さなければ何一つ出来はしない。人目につく衣服を早々に処分したいものの、それには先立つ物が必要だ。

（まずは……職）

出来れば知識があまり必要でない所。この世界での人間社会の常識など皆無なのだ。これに関しては竜も光珠も頼りにできない。さらには……住み込み可能な所。

そこまで考えてあまりの無謀さに頭痛がしてきた。誰が見慣れぬ衣服を纏い、どう見ても事情がありそうな人間を容易く雇い入れる訳が無い。人の良さそうなタイプに切々と頼み込むしか術は無いのだ。

ここまで歩きながら多くの人々を見てきたが、色彩は問題ないようだった。金髪や赤毛などの異なる色も多いが、黒髪の者もそれなりにいた。ただ、幾分顔立ちは異なっていた。僅かにこちらの人々の方が彫りが深い。翠は幸い日本人にしてははつきりとした目鼻立ちをしていた為、少々違和感はあるだろうが奇異にうつるほどではないだろう。

（一番の問題は……表情）

光珠と共にいたおかげで、強張りきった頬も柔らかさを思い出し、自然な笑みを浮かべる事ができてはいるが……ヒトの前で、上手く表情を作れるか。

失う事を恐れるばかりに、他人に近寄ることも——近寄ってこられることも、避けるのが常だった。無意識に壁を築きあげ、感情を浮かべる事ができないのだ。

（あれは——受けが悪いのよね）

そんな自分が唯一できた表情は、営業スマイル。社会人になってしまえば、円滑に業務を行うために無理やりにでも笑顔を浮かべなければならなかった。

仕事だと思えば自然と笑顔が浮かび上がる——それが、形ばかりを取り繕った、上辺ばかりのものでしかなくとも。

目を細め、口元をきゅっと引き上げる。そうすればずっと見は笑顔に見えるのだ。だけど、やはりそれは自然なものではないのだろう。自然と皆一線を画して翠と接してきた。

だが、そんな笑顔でも無いよりはマシだろう。能面のように無表情を張り付けた怪しい女と、営業スマイルで固めている怪しい女。どちらも怪しいことには限らないが、無表情よりは笑顔のほうがまだ良い気がする。

「さ、行こう」

パシリと両手で顔を軽く叩き、気合を居れ笑顔をその上に乗せる。不自然だと翠が思っているその笑顔は、元来の顔立ちもあり、美しいものだった。だが、それ故に他者には近寄りがたい気持ちを与えていた。

けれど、そんなものは時間と共に慣れてしまう。周りが近寄ってこなかったのは——その近寄り難さ以上に、翠の拒む空気にあつたのだと、未だ翠は気付こうともしない。

今もまた他人と関わろうとしているのにも関わらず、自然と他者を拒む空気を放ちながら、翠は喧騒に紛れるように一歩足を踏み出した——

第8話 逃走劇

「ごめんなさいね、今人手は足りてるの」

パタン、と硬い音を立てて出てきたばかりの扉を見上げる。町へ出てきて気付いたが、どうやら自分は文字も読めるようだった。だがそれは完全なものではなかったが——自分の知っている言葉に自動的に翻訳されているようなものだろう。翠の知識にない語彙は、その部分だけがアルファベットを崩したような文字にしか見えないようだ。

そして、扉に貼られていたビラは求人広告。

はあ……と小さく溜息を吐く。心配そうにそつと翠の頬に触れてくる光珠に大丈夫だよと笑いながら、翠は再び歩き出す。

見慣れぬ衣服のままあまり動きたくはなくて、大通りより一本離れた筋を選び、次々と扉を叩いていた。可能性をあげるためにまずは求人広告を下げている店舗。そのうち、この世界特有の知識を必要としないとなれば、過酷であろうが単純作業でなければならない。もう体力には自信があるとは言えない年齢だが、翠は職種は問わずその扉を叩いて行く。

……職探しだけで、どれだけ門前払いをされてしまっただろう。この上住める場所を求めなければならぬ事に、溜息も出る。

また一つ、新しい溜息を吐いて路地を曲がる。

「……………っ!!」

右腕に走った痛み在眉を顰める。強く捕まれ引き上げられた腕の先には、厭らしい笑みを浮かべた男が一人立っていた。

「何だあ？変な格好した女がここらをうろろしてるって言うから見てみりゃあ……いい女じゃねえか」

楽しげに下卑た笑いを浮かべながら、捕まえていた腕を引き寄せ、

背後から身動きできないように捕らえようとしてくる。

反射的に踵を浮かべ、思い切り男の足を踏みつける。痛みに手が緩んだ隙に、身を捻り男の顎を下から突き上げる。躊躇する暇はなく、そのまま手を伸ばし男の耳を掴み引き寄せながら……膝で股間を思い切り蹴り上げた。

苦悶の叫びを背中中で聞きながら、男が身を縮めている隙に全力で駆け出す。――背後で怒りに満ちた声上がるが、足を止めてはお仕舞いだ。

（こんなところで役に立つなんて!!）

見事に翠の攻撃が入ったのはただの偶然に過ぎない。普段から高く止まっているとか何とか理由をつけては絡んでくる人間が多かった。翠の無表情が歪む様が見たいのか、侮蔑の言葉を投げてるだけならまだ良かったが……稀に、力を誇示しようとする者もいた。

普段から一人でいることが多い翠は、出来るだけ人通りの多い場所を歩くようにしていたから、大事になったことは無いが……もし助けのない場所でそれが行われたら。そんな懸念に本やネットで簡単な護身術を調べたりもした。

どこかに通い本格的に習うことは、他人と密に接する可能性を前に断念した。……結局翠に出来ることなど、少しでも己の硬い部分で急所を攻める程度のことしかできない。あとは――逃げることに。

（……早く、しないと）

あの男の怒りに満ちた怒声はまだ耳に残っている。

あれほど怒り狂っていた男が報復を考えないはずはない。逃げ回っていても目立つこの姿を探すことは容易いだろう。

（どこか……どこかないの!?!）

足を止めないまま、視線をあちこちに走らせる。土地勘のない翠には進むべき方向も判らない。光珠に頼むことさえ思い浮かばないまま、翠は路地を縦横無尽に走り抜ける。

「痛……っ！」

先ほど男の足を踏みつける時には役立つたヒールが、今度は翠の足を痛める。微かな段差に足を取られ、僅かに捻る。たいしたものではないが、このまま駆け続けるには苦しい。

足を鈍らせながら進む翠が不意に身を強張らせる。

（今の……っ！）

姿は見えないが、小さく聞こえたあの男の声に、すぐ傍まで迫ってきているのを悟る。恐怖に身が竦みそうな思いを耐え――

翠は目の前で開いた扉に駆け込んだ。

第9話 逃れた先で

僅かに開いた隙間に身体を挟じ込み、外へ出ようとしていた人を押し込むように扉を潜る。

「……つと、なんだい、危ないじゃないか」

「ごめ……な、さ……っ」

押し退けられ、驚きを露にしている女性に、翠は整わない息で何とか謝罪をする。その間も駆け続けた身体は空気を欲し、肩を上下させ荒い呼吸を繰り返す。

「はいよ、これでも飲みな」

「あり……がと、ござ……ます」

手渡された器には、冷たい水がなみなみと満たされていた。零さないように気をつけながら、こくり、こくりと水を口に含む。

冷たい水が喉を滑り落ちてゆくのと連動するように、すう……と荒れていた心も落ち着いてゆく。周りを見渡す余裕も出来顔を上げると、微妙な表情をした恰幅の良い女性が少しばかり心配そうにこちらを覗きこんでいた。

「……有難うございます。お怪我はありませんか？」

外へ出ようとしていた所を無理やり押し込めてしまったというのに、親切に水まで出してくれたのだ。申し訳なさに伏せてしまいそうになる瞳をしっかりと合わせ、深々と頭を下げる。

「あんたみたいな細い娘がぶつかっただけでどうこうなる体はしてないよ」

からりと笑う、その笑顔が温かかった。そう思うのに、笑顔を返すことも出来ず、翠はもう一度軽く頭を下げるに留まる。

「ここは……？」

暗い室内にはいくつもの卓と椅子が並べられていた。黒い枠組みに朱に染められた天板を持つ卓に、同じ色味の椅子。中華風なのに

その形は西洋風。町並みだけでなくこういった小物も同じ様式で作られているようだ。

整然と並べられているその数は一般的な量ではなく、何がしかの飲食を行う店舗なのだろうか。

「ああ、夜にちよつとした酒場をしてるんだよ。ハンナの酒場っていやあこの辺りじゃちよつとは有名さ」

ハンナのその言葉に、翠は瞳を輝かせる。じっとハンナを見詰めれば、その気迫を感じたのか、ハンナが驚いたように目を見張る。

「お願いです、こちらで働かせていただけませんか！掃除でも、皿洗いでも、配膳でも、皮剥きでも、出来ることなら何でもします！」

お願いします！と先程のように、深く深く頭を下げ、頼み込む。雇ってもらえるのならどこでも良かった。けど……

「ご迷惑なのは、重々承知しています。……身元を保障してくれる者も居りません。ですが、こちらで働かせて頂きたいんです。迷惑しか掛けてないのに厚かましいお願いですが……っ！！」

最初に思っていたように、切々と情に訴えるという手段は頭から消え失せていた。ハンナの優しさもだが、その笑顔が……祖母、そっくりだったのだ。

大抵の事は笑い飛ばしてしまうような、豪快だった祖母。あけっぴろげなハンナのその笑みが懐かしくて、気付けばただひたすら懇願を繰り返す。

「お願い致します……」

最後にはとうとう声が震えてしまった。

ぼん、とそんな翠の頭に、温かな手が添えられる。

「本当に、何でもするんだね？」

「は……い……」

「夜だけじゃない、昼間も掃除や仕込みもある。夜も遅いが朝も早い」

「はい……」

「あたしゃ、人使いが荒いよ」

「はい……」

「返事はもっと元気に！」

「はい！」

「これから宜しくね。あたしはハンナ。あんたの名前は？」

「スイ……スイです、宜しく願います！」

何度も、何度も頭を下げる。最初に見たハンナの表情からも、自分を怪しく思っていたのは明らかなのに、受け入れてくれたことへの感謝の念をその行為に込める。

本当に、心の底から感謝しているのに、今も自分の顔には表情が浮かんでいないのは判っているからこそ、他の事で気持ちを伝える。「ほら、そんなに頭ばかり下げないで！可愛い顔してるんだから笑ってごらんよ」

「……はい」

浮かべた笑みは、きっと滑稽なものだったろう。ぎこちない笑みと、作った笑みの混在したそれ。

距離を求める心と、懐かしい暖かさへの郷愁。読^{せめ}ぎ合った心をそのまま写し取った笑み。それが今の翠の精一杯だった。

「……今日はいいいから、明日またおいで」

また微妙な顔をしながらも、ハンナはそう言ってくれて……安心した翠のお腹が、文句を言うように音を立てた。

「……………」

謎が多く、気になることもいろいろある翠だが、その瞬間の、年頃の女性らしい真っ赤に頬を染めた反応に、ハンナの顔が今度は豪快に笑み崩れた。

第10話 長い一日

ばかりと柔らかな寝台に寝転び、古びた天井をぼんやり眺める。
途端にわらわらと光珠が翠を囲む。

《スイ、大丈夫？大丈夫？……僕ら、何も出来なかった……》

しょんぼりと瞬く光珠にそっと手を伸ばす。触れる感触は無くとも、慰撫するように何度も撫でる行為を繰り返す。

「そんなことはないよ、コウ。そうして心配してくれるだけで十分なんだよ？」

混乱していた思考では、光珠に身を隠してもらうことさえ思いつけなかっただけの翠だったが、頼らなかった事で光珠を傷つけてしまった事に反省する。

光珠が浮上するまでそうやって撫でていると、次第にその光が強くなり、ほわほわと薄紅を混ぜた色になってきた。それに安堵して翠も笑う。

（それにしても、疲れたなあ……）

通勤途中で突然四方を闇に囲まれた瞬間の驚愕。そして……見知らぬ世界と、想像上の生物だった光珠や竜との出逢い。

さらには突然の婚姻と、竜の半身からの逃走。追いつけかけように、職探しをしてたら暴漢に襲われかけ——ここに辿り着いた。

あまりにも長い一日を思い返し、翠は一気に疲れを感じた。手当てされた足は今も鈍く痛む——その足に巻かれた包帯を見て、翠は切なげに瞳を伏せる。

（ハンナさんには、返しきれないほどの恩があるな……）

空腹を訴えた翠の腹に爆笑すると、ハンナは暖かな食事を出して

くれた。

「簡単なものしか無いけどね、味だけは天下一品だよ！」

そう言って出されたスープは温かく、緊張しきっていた翠の胃に染み渡り、身体の内側からじんわりと暖められるようだった。――
――他人の手料理を食べるのなんて、久し振りだ。潤みそうになる瞳を瞬くことで抑え、やさしい味のスープをさらに一口飲む。

人を拒絶するくせに、人の温かさを求める。そんな自分の勝手さに、翠は歪みそうになる唇を噛み締める。

「……そんなに噛むんじゃないよ、怪我するよ」

自己嫌悪に沈んでいた翠が、その言葉にハッとした様に顔を上げる。

「あたしの旦那の料理をそんな顔で食べるんじゃないよ、そんな顔しなくても、あんたの事情なんて聞きやしないよ」

その格好だけで、訳ありだって宣伝してるようなもんじゃないか。

――そのハンナの言葉に翠はただ目を見開くことしか出来ない。

「そんな顔でスープ飲んで……」。住む所も無いんじゃないかい？」

その問いかけに呆然た翠はぼろりと零す。

「……これから、どこか探そうかと……」

本当はハンナにどこか紹介してもらえば良いのだが、職を与えてくれ、こうして無一文の自分に暖かな料理を振舞ってくれた。

これ以上の迷惑を掛けるなど恐ろしくて出来ない。

ハンナに聞かれても、心配かけないような答えを返すつもりだったのに、まるで宿無しだと気付いているかの問いに驚き、思考を巡らせる余裕もなく、つい素直に返してしまった。

「なら、住み込みで働いてもらおうか」

「そこまでご迷惑はっ!!」

ガタリと椅子を蹴倒すような勢いで立ち上がり、翠は必死に首を振る。

「何を勘違いしてるんだい、その代わり扱き使うからね！……食事
も出すけど、給料から差っ引くから気にしないでいい。部屋は、あ
たしの娘が住んでた部屋がある。そこを使うといい。もちろんあん
たが掃除するんだよ。——服も、部屋にあるのを使って構わない。
どうせあたしの娘は結婚して子供産んだせいで体型が変わって、も
う着られないんだから遠慮する必要もない」

「そん、なに、してもらっても、私には何もお返しできません……」

あまりにも都合が良すぎて、逆に心がずしりと重くなる。

本当に、返せるものなど何もないのだ。何一つ持たずこの世界に
呼ばれた翠には、文字通りこの身一つしかないのだ。

「だ・か・ら、変わりに扱き使うって言うてるじゃないか。馬車馬
の如く使ってやるから受け取っておきなスイ」

「でも……っ！！」

「こういう時は、有難うって言うっておきゃいいんだ。ほら、部屋は
こっちだよ、とっとと着いて来な。あたしゃこれから材料を買いに
行かなきゃいけないんだから！」

「あ、有難うございます！あ……私、買い物のお手伝いします！！」

この問答はこれで終わりだとばかりに立ち上がるハンナの後を追
いながら翠が叫ぶと、さらに呆れたような顔をされ、ペしりと額を
軽く叩かれた。

「そんな足で何言ってるんだい！まったくこの子は……呆れて物が言
えないよ。今日はとっとと風呂入って寝て、明日は早く起きてくる
事！わかったね！」

反論する間など与えずまくしたてると、ハンナは翠に宛がった部

屋へと彼女を押し込んだ。その勢いに吞まれた翠がそのままの姿で突っ立っていると、何怪我してるのに馬鹿みたいに立ってんだい！との叱責と共に、葉を持って戻ってきたハンナにまた、額を小突かれたのだった。

野宿の可能性さえ考えていたのに、こんな立派な部屋にいる自分が信じられない。

（でも、これで……ここでちゃんと、生きて行ける）

ふわふわとしていた足場が、少し地を踏みしめた気がする。気が早いものだが、今までと同じように働く場所を得たことで、どこか落ち着いたのだろう。

——この世界で生きて行く覚悟は光珠と出遭った時にしたけれど、この世界で生活する実感が沸いてきたのだ。

（バルドルにも、報告しなきゃね……）

あの時、ジークハルトに向かい合うことを躊躇^{ためら}う翠にバルドルは、とん、と扉を鼻先で突付いて押し開き、翠をそつと扉の前に下ろした。

《——行くが良い。ジークハルトが来る前に》

「……いいの？」

《アレは我が半身だが、我にとっては其方の意思こそが勝る。……そんな顔をするでない。我は——すぐに、逢いに行く》

自分が泣き出しそうな顔をしていた事には気付かず、翠は逢いに来るというそこに疑問を抱く。

「バルドルはここから出られるの？」

《我が正気を失っていたからこそ、ジークハルトによりここに留められて居ただけの事。契約が成され正気に戻った以上、我を縛りつけておけるものではない》

「そっか……でも、私何処へ行くかまだわからないよ？」

宛てなどないのだ。待ち合わせようにも、ここの地理さえも翠には判らない。

《そやつらに使いを頼む。光珠とは我に近い存在だからな。それに

——我には其方の居場所を感じる事が出来る》

居場所が判るってどういうこと？と翠が首を傾げるが、すでに猶豫はない。

《今はその問いに答える刻ときを持たぬ。再び見えた時、其方に教えよう。だから今は——》

疾とく行け。近づくジークハルトの気配に、バルドルが翠の背をやるわりと押しやる。その鼻先に素早く口付け、翠は再会の約束と共にバルドルに背を向けた。

「わかった、待ってる」

きょとんと、厳いかつい顔のバルドルが目を見開き、遠くで巨大な尻尾がばったばったと揺れていた姿を思い出し、翠は楽しそうに口元を緩めながらそっと瞳を閉じた。その目蓋の裏に、もう一人の人物の顔が浮かび上がりかけるのに、気付かない振りをしながら——

幕間 恩寵 Sideジーク

鼓動を高鳴らせ、知らず知らずのうちに震える手で開いた扉の先には——求めるものなど無かった。

広大な竜癒の間に座するのは、巨大な体躯を持つ半身。それのみであった。

「……我が竜珠は、何処だ」

硬い声で告げるジークハルトに、バルドルは沈黙のみを返す。

カツリ、とジークハルトの心と同じ様に硬い音を立てて、バルドルの間近で足を止める。

「他ならぬお前に……翠に焦がれる想いが判らぬはずがなからう！」
己が半身を睨み付けるジークハルトを、バルドルはただ見下ろすばかり。冷たい石造りの室に沈黙が横たわる。

けれども、ジークハルトが退く事など有り得ない。

名付けのみではなく、竜の婚姻を交わしたものに与えられるものがある。

おんちよう
——恩寵。

それは、そう呼ばれた。

一対が伴侶を求めし時、その契約は求める相手によってその儀は変化する。

ヒトを求めし時、その儀は他の人間と大きな差異は無い。

竜珠を伴侶に求めし時は——その真名を竜王と竜、互いに交わすだけで良い。けれどそれは、竜身と言葉を交わせる竜珠のみが行える方法。真名を以って、互いの魂を結びつけるのだ。

それは、竜の契約。ヒトの契約とは異なり、竜の性^{さが}を解き放つ。
……尋常ではない独占欲。それは、理性では御^{ぎよ}し得ないものだった。それ故に生まれる嫉妬。

その欲を抑えるために与えられし恩寵。

婚姻の儀を交わしてしまえば、互いの居場所をぼんやりとではあるが感じ取ることができる。

ただそれだけのものが、竜王と竜の一对にとって多大な影響を与える。

伴侶の気配をいつでも感じられるというだけで、常に傍に繋ぎ止めずとも精神は均衡を保つ。

「契約半ばとはいえ……今も、気配を感じ取れるのだろうか？」

ぽつりとジークハルトが呟きを落とす。その力ない声に、バルドルがゆらりとその体軀を揺らす。

《——あの者には……時が、必要だ》

漸^{ようや}く重い口を開いたバルドルは、非情にもジークハルトに更なる時を望む。

翠が抱えているものが何なのか。それはあの短い逢瀬だけではバルドルにも感じ取れない。けれど、ジークハルトから距離を置こうとする翠へと問いを放った時の表情は——

《だが、少なくともあの者は——翠は、其方^{そなた}を厭^{いと}うては居らぬ》

「ならば何故、我が許より去る」

《そこまでは、我にも解らぬよ》

それは、竜珠を見いだし、自ら問うと良からう。

そう続けるバルドルに、ジークハルトが顔を上げる。翠を探し出

せと告げているようなものだからだ。

竜の妬心は、他者にのみ向けられるものではない。互いの半身へ向ける思いが何より強い。

バルドルもまた、例外ではないのだが——未だに竜珠と見える事の適わぬ半身の想いは過ぎるほどに理解^{わか}るのだ。

《助力はせぬ。されど——妨害もせぬ》

「……それで、十分だ」

バルドルが動くとなると、人の身であるジークハルトでは適わない。その翼で翠を連れ、大空を駆けてしまえば追いつけるものなどいないのだから——

けれど、邪魔をされぬのであれば……何としてでも探し出してみせる。

ジークハルトは、時を惜しむように身を翻^{ひるがえ}す。

（逃れられると思うな——翠）

この焦燥も、扉を開いた瞬間の喪失感も。何もかも——その身で贖^{あがな}ってもらう。

ジークハルトは不敵な笑みを浮かべながら、その場を後にした。

幕間 執着 Side ジーク

「——ガイ。信を置ける者を選び出し、竜珠を探し出せ」

扉の前で控えていたガイに、ジークハルトは言い放つ。足早に進みながらも、次々と指示を飛ばして行く。

「容姿に関しては全て不明。なれど異界の者だ、何がしかの違和感はあるう。行動、言動、容姿、服装、仕草……何でも良い。引っ掛かる部分があれば秘密裏に素性を調べよ」

「はっ」

掛けられる言葉を問い返す事も無く、ガイは頷き呼び出すべき者を頭に浮かべながら、探索の手段を練ってゆく。

「……そして、過去が調べられない者があれば報告せよ」

「………」

「どうした？」

いつものように返事を返さないガイを、ジークハルトは振り返る。

「報告……だけで宜しいのですか？」

相変わらずの無表情を貫くガイが、僅かに困惑を声にだけ滲ませた。

「構わぬ。無理やり引き摺って来た所で……何も得る事は出来ぬ」

「御意」

「セルジオも好きに使え。あの男は面倒な事を積み上げる程に嬉々として働くからな」

己の片腕とも言えるセルジオをそんな風に表しながら、ジークハルトは当の本人が居る執務室への扉を開く。

「凄いいわれようですね。私はそんな変人ではありません」

扉を開きながらの会話が聞こえていたのか、失礼だと言わんばかりのセルジオに、ジークハルトは低く笑う。

「暇を与えれば詰まらぬ顔をして出て行っては、厄介な問題を抱え

て帰ってくるような男は変人で構わん」

この所見られなかった、軽口を叩くジークハルトに、セルジオはその柔和な顔に笑みを乗せる。

「竜珠の姫の所在が判明した……わけでは無いようですね」

しかしその笑みも、ジークハルトへの問いかけの最中に次第に曇ってゆく。居場所が判ったのかと問いかけた瞬間の苦々しい表情を見れば言わずとも答えはわかる。

「ガイを使う。探索の範囲は城より人の足で行ける範囲」

「そうですね……ですが、あのお方がその翼で姫を運んでしまえば探索の範囲は途方も無く広くなりますが」

漆黒の竜の、竜癒の間をも覆いつくすほど巨大な翼を思い返しセルジオが告げる。

「それは無い」

「……と、言いますと？」

「我が半身は、関与しない。手助けはせずとも邪魔もしないと言質を取った」

「何と……！あの方が傍観に徹すると言われるのですか！？」

信じられない、そうセルジオの瞳は雄弁に語っていた。

「あまりも我が姿が情けなかったのだらうよ。同情半分……といったところか」

溜息を吐くジークハルトに、セルジオは苦笑する。

「ですが、良かったじゃありませんか、一番の懸念は……あの方が執着心故に竜珠の姫を隠される事でしたから」

セルジオが言う言葉は大げさでも何もない。

民の間では御伽噺のように語られている、竜王と竜珠、そして竜の仲睦まじい一揃いの姿。それは、そんな可愛らしいものではなかった。

竜王と竜。同じ魂を一つで分けているのだ。勿論——愛する者も、同じである。

相手がヒトであれば、竜も諦めがつくのだろう。竜とヒト、互いの意思を図る事も出来ないのだから……。

だが、相手が竜珠となれば状況は一変する。

言の葉を交わし、その心に触れ、伴侶となる。それでは竜も諦める事など出来よう筈^{はず}がない。

歴代の竜王の中でも、竜珠を伴侶にした者は流布^{るふ}しているほど多くはない。だが、その少数に該当したものは例外なく、半身たる竜と激しい争奪戦を繰り広げる。

互いに妬心を抱きながらも、恋敵は己の半身故に消すことなど出来はしない。

しかも想いが深まれば深まるほど、相手も同じだけの気持ちを抱く^くのだから始末に負えない。

どちらか一方が想いを手放すことなど無い^{ない}ため、竜王と竜——彼らの争奪戦に終わりなどないのだ。

伴侶として竜珠を求めぬ竜王は幸せだ。竜が名を得た後は、折に触れ見える^{まみ}ことができれば事足りる。互いの半身と伴侶の奪い合いなどせずとも良いのだから。

だが、永遠の妬心に縛られるものの、竜珠を伴侶とした竜王はそれ以上に幸せだ。

——魂からの結びつき。その喜びは言葉に出来ぬものなのだから——

閑話 笑顔 Side ハンナ

「ああ……今夜は、月の神がたいそう綺麗じゃないか」

ハンナは軋む扉を開き、煌々と輝く月の光を受けながら、部屋に入ってきた亭主を振り返る。

「何だ、まだ寝てないのか」

「流石に今日は色々あったからねえ」

突然飛び込んできた翠を思い返し、苦笑しながらハンナが返すと、亭主は元々の顰めっ面をさらに渋くする。

「お前が決めたことだ、否定する気は無いが……本当に良かったのか？あれで」

見目は悪く無いが、他人を拒否する雰囲気を持った翠は多くの問題を抱えていそうだった。

——見慣れぬ服、美しくはあるが、見慣れぬ容貌。硬い表情は緩む気配も無く、ようやく浮かべた笑顔さえ強張りきっていた。けれど……

「……今にも、泣き出しそうだったんだよ」

駆け込んで来たはずの翠が、ハンナを見上げた顔には焦りさえも浮かんではいなかった。けれど、よくよく見てみれば、堅く組まれたその指先は小刻みに震えていた——

それだけでも、このまま放り出す気になれなかったが……仕事を求めるその瞳からハンナは目が逸らせなかった。

表情とは裏腹の必死な口調、熱意溢れるそれよりも、翠の瞳は雄弁だった。まるで、手を離されないように必死な子供。

遠い昔、幼い我が子がはぐれた時を思い出した。置いて行かれまいと、必死に繋いだ手を握りしめていた小さな娘の顔は、今でも忘れられない。

そのせいか、生来の世話焼きの性が顔さがを覗かせた。あんな姿で仕事を必死に探している者が、とてもじゃないが普通の生活をしているようには思えず……つい鎌をかけてみると案の定だ。

ここで帰して、何かあっても寝覚めが悪いと住み込みを勧めてみれば、やけに遠慮する。

本当は使っていない客間を与えようとしていたのに、その姿を見ていたらつい、もう戻る事のない娘の部屋に住まわせるような事を言ってしまったのだ。

「……それに、あの子は得体が知れないけれど、悪い子じゃあないよ」

何と言っても、アンタの料理をあんなに大切そうに食べてくれたしね！そう豪快に笑うハンナの台詞に、亭主も翠がスープを飲んだ時の事を思い浮かべる。

一匙スープを口に含むと、まるで二度と食べられない高級料理を食べるかのように、一匙、また一匙と口に含む翠の姿は、意外なものだった。

荒れる事を知らないような指先。綺麗な形を保った爪。

それは、男からしてみれば、働く事を知らない手だった。こんな手で、先ほど口にしたように水仕事や汚れ仕事をするなど、期待出来そうにもなかった。

それなのに、手間暇かけているとはいえ、スープひとつであんな反応をする。

いったい、どんな生活をすればあんな風になるのだろう。あまりにも翠は不可解な人間だった。

ただ——もっと美味しいものを食べさせてやりたいとは思ってしまった。

そこまで思い、男は結局自分も絆されていたのだと知る。

「……ちゃんと、笑顔を見てみたいもんだね」

上辺ばかりの笑みでもなく、最後に見た、泣き出してしまいう寸前のような笑顔でもなく。

幸せそうな笑みを浮かべた姿を見てみたい。

「——そうだな」

頷いた亭主に、嬉しそうにハンナはその背を叩いた。

第11話 新たな日常

「いらっしゃいませ！」

元気の良い声が響く。大通りから少し離れているとはいえ、それが逆に隠れ家のような雰囲気を持つこの酒場は絶えず賑わっていた。女将であるハンナの人柄や、その亭主の料理の腕もあり、人気は上々だった。

その酒場に、最近働き始めた女性が居る。貼り付けたような美しい笑みは、当初常連客には不評だったがそれは次第に変わっていった。

会話に興じる事もなく、硬い笑顔はそのままだが、妙に可愛らしい時がある。くるくると休む事無く動き続ける姿は真面目で、時折見せる綺麗とはとてもいえない、ぎこちない笑顔は妙に庇護欲をくすくす擦った。

最初は、毎日酒場に通いながらも、酒を飲まず料理ばかりを食べる男。

いつ見ても手を抜くことを知らないかのように、何事も必死で覚えようとする翠の姿を、自然と目が追うようになった。

その次は、女将との会話を酒の肴に通う女。

丁度女将が席を離れていた時に、戸惑いながらも頑張って話を繋ぐ、その必死さに好感を覚えた。

そうやって、最初は困惑したように翠を見ていた者達が一人、一人と自然に彼女を受け入れ始めた……

朝はまだ暗いうちから起き出し、ハンナに連れられて朝市へと向

かう。

肌寒さに身を竦めながらも、一つ一つ、その特徴を教えてくれるハンナとの仕入れは得難いものだった。

この毎日の仕入れを通して、翠は自然とこの国の料理や食材、物価を知る事ができた。

一抱えはある食材を、引いて来た荷台に積み歩き出すと、人当たりの良いハンナの知人から、次々と声が掛かる。

笑顔を作り、翠もそれに会釈を返しているうちに覚えられたのか、最近では彼女の名を呼んで挨拶をしてくれる人も出始めた。

——他人との接触には、未だ慣れない。けれど右も左もわからないこの世界で、一人で生きていける訳が無いのだ。

声を掛けられる度に戸惑う翠に、ほわほわと光珠が纏わりついてくる。最近はこちらも慣れたのか、何時の間にか翠の肩や頭の上でご機嫌に光っている事が多い。そうして、こうやって翠が困惑している時は、それを察したように大丈夫だよ、とばかりに翠の周囲をくるくる回るのだ。

朝食は、翠の担当だ。

長年一人暮らしを続けていたおかげで、手付きは悪くないのだが、如何せん、調味料がわからない。可愛いピンク色の粉を見たときなど、何だろうと思って舐めてみて、見た目には甘そうな色合いのそれが塩だったのには驚いた。

ハンナの亭主、ザックは武器屋が似合いそうな無骨な容姿とは裏腹に、作る料理は繊細な味付けだった。

手間を惜しまず作る料理は絶品で、未だに自分の料理を出す事に申し訳無さを感じてしまうが、料理の腕が上がったら厨房も手伝ってもらおうと言われてしまえば、朝食作りにも熱が入ろうともいうも

のだ。

昼までに洗濯や掃除を終わらせ、ハンナの手料理を頂いた後は夜の仕込みの手伝いをする。

見慣れない材料を、指示されるままに下ごしらえしながら、ちょっとした料理のコツも教わって行く。

夜にようやく店が開くと、今度は翠は小さな店内をぐるぐると走り回る。そのすぐ後を光珠が追うのは他の人には見えていない。

ハンナが居ないときには、常連客の数人に声を掛けられては話し相手をさせられる。

物知らずな翠を面白がるように、皆次々と教え込んで行くのだ。それらは、翠にとっては大切な糧となる。この世界のことをちょっとずつ知識として蓄えていけるのだから。

（本当は、判ってるんだよね……）

こうして、ハンナが手伝わせている一つ一つのことが、翠をこの国に馴染ませるための行為なのだ。それに気付いた時、またもや申し訳なく思ったが、好意に対して謝る事が望ましくないのだと、ハンナに叩き込まれてしまった。

好意には感謝を。謝罪ではなく笑顔を。

長い間こんな風に叱ってくれる人なんて居なかった。言われる言葉の一つ一つにはハンナの善意が透けて見え、時折、夜一人になると泣き出したい気持ちになる。

こんなに、得体のしれない自分を大切にしてくれているのに。

こんなに、面倒な顔一つせず、様々な事を教えてくれているのに。それでもまだ、線を引こうとする自分がある。それが情けなくならない。

そんな気持ちを振り払うように、翠は何でもやった。一心不乱に働いていると、頭が真っ白になる。そうして日々を過ごし、少しずつこの生活にも馴染んできた頃……予想外の再会が待ち受けていた。

第12話 望まぬ再会

店内に漂う、美味しそうな香り。

今日の一日を^{ねぎら}労うように、美味^{うま}そうに料理に舌鼓を打つ者、楽しみに乾杯し、杯を満たす酒を飲み干す者。雑多な音に溢れた店内を、翠は今日もまた駆け巡る。

「スイ！次上がったよ！」

「はい！」

熱々の皿を手にして、零さないように人の間を擦り抜けて行く。少しは慣れてきた手つきで皿を置く。

「お待たせしました」

「……ああ」

酒場に来るのに、いつも料理だけを食べて帰るこの男は、言葉少ないながらもその瞳が言葉以上に言葉を伝えていた。今も熱い皿を持ち少し赤くなった翠の指先を心配そうに見詰めていた。

言葉どころか表情も少ないのだが、己がそうであるせいか、逆に落着く。

「大丈夫ですよ、慣れましたから」

ぎこちなく、翠は営業スマイルではない硬い笑みを浮かべる。

最初の頃、熱い皿を上手く持てなかった翠は、常連のこの男の前でひっくり返してしまった事があった。

内心慌てて片付けていたら、割れた皿が指先を傷つけてしまった。わたわたと周りで光珠が騒いでいる中、男はゆっくりと立ち上がると翠の手をとり、指先をじっと見詰めてきたのだ。

「……破片は入ってないようだ」

その言葉に、傷口に欠片が残ってないか調べてくれた事に気付いた翠は、有難うと精一杯の笑みを浮かべた。

「……無理に、笑う必要はない」

本当の笑みなのに、作り笑いのように思われてしまったのだろうか、落ち込む翠の目が、こちらを覗きこむ漆黒の瞳と合う。

（——ああ、判ってくれてるんだ）

自分が笑顔を作るのが上手くない事を。宥めるような柔らかな視線に、そう感じた。

それ以来、翠が慣れない仕事を覚えようと無茶をしていると、嗜^{たしな}めるような視線を。前日の疲れが残っているような日には、心配するような視線を向けてくるようになった。

仕事中は営業スマイルを貼り付けて表情を作っている翠と、いつでも無表情な無骨な男。ぱっと見は対照的な二人だが、どちらも感情を表に出す事が不得手だった。

その一点だけで、他の常連客よりも翠には近しく感じられた。今となっては目を見ると男が何を言いたいのか少しは判るようになってきていた。

今も、翠が下手な笑みを浮かべているのを見て、男も僅かに笑ってくれている。ただ切れ長の瞳をさらに細める程度の動きだが、間違っでは無いだろう。

強張りきったようなものでも、何故だか男は翠のこの笑顔を好んでいたから——

最後にもう一度笑むと、翠は黒髪の男から離れ、次の料理を手にして別の客へと運んで行く。

いつものように、お待たせしましたと口にした翠の手が突然掴まれる。

「……っ」

加減も無く掴まれた手首に痛みが走る。痛みを堪えるように唇を噛み締め、咎めるように視線を上げるとそこには、意外な姿があった。

「こんな所にいやがったのか!!」

翠の手を掴んでいたのは——この酒場に逃げ込む切っ掛けとなった男だった。

第13話 一瞬の攻防（前書き）

※この回には軽くとはいえ暴力描写がありますので、ご注意ください。

第13話 一瞬の攻防

先日と同じ様に何とか逃れようとしても、今度は男も警戒しているのか、翠の動きから目を離さない。

習い覚えた訳ではないため、警戒している相手には打つ手が無い。男女の力の差は歴然としていて、翠は痛む腕に歯を食いしばる事しかできない。

「会いたかったぜえ……？あの時は舐めた真似をしてくれたな」
怒りにギラギラとした目で見下ろされ、掴まれた腕が痛みだけではなく、小さく震える。

「何やってんだいアンタ！その手を放しな！！」

厨房から出てきたハンナが間に入ろうとするが、容易く押し退けられ、すぐ傍の卓に叩きつけられる。
テーブル

「ハンナさん！！」

駆けつけようにも、身動きがままならない。恐怖より怒りが込み上げ、翠は力いっぱい男の脛を蹴り上げる。
すね

「……っ」

痛みに呻いた男が、さらに掴む手に力を込めてくるが……泣いてなどやるものか。翠は滲みかける視界で、精一杯目を見開き男を睨みつける。

それがさらに癪に障ったのか、そのまま店の外へと翠を引き摺り出そうと歩き出す。逆らうように全力で留まろうとしても、容易く引き寄せられてしまう。

——光珠に願おうにも、ここは余りに人目がありすぎた。

（——悔しい！！）

力で無理やり従わされる事、そして何より……ハンナに手を上げた事。沸々と湧き上がる怒りに、翠は思い切り目の前の腕に噛み付

く。

驚いた男に乱暴に振り解かれ、翠は幾つかの椅子を巻き込みながら床に倒れる。痛みに閉じた瞳を開くと――再び男の手が目の前に迫る。

ひゅう、と翠が息を呑む音と、その声は同時だった。

「……大人しくしろ」

聞きなれた声が、耳を打つ。

いつもは穏やかに響く声が、今は険しいものを孕んでいた。

「関係ない野郎ははすっこんでろ!!」

先程と逆に腕を掴まれた男が、怒鳴り振り解こうとするが、拘束する腕は微動だにしない。こうして立ち上がっていればかなりの上背があるが、細身に見える身体の何処にそれほど力があるのだろう。

傍目にも逞しい暴漢と並ぶと、一見相手にもならなさそうなのに、微塵の揺るぎもない。

「警告する。今すぐこの場を出て行くのならば、これ以上の事はしない。だが――」

続けようとした言葉が宙に消える。残った方の腕を大きく振り被り、男が殴り掛かろうとした瞬間、その姿は地に沈んだ。

「え……?」

一瞬の攻防を目で追う事が出来ず、ただ呆然とした声を上げる翠は、目の前に差し出された手を眺めるしかできない。

「……怪我は無いか?」

動こうとしない翠を支え、立ち上がらせると、そう問いかけてくる。

「……はい」

「――無茶をする」

翠の行動を嗜めるその行動も、こうしてすぐ傍で見詰める漆黒の瞳も、見知ったものだった。

「すみません……助かりました」

項垂れながらも、続けて感謝の言葉を告げた翠は——はっとして後ろを振り返る。

「ハンナさんは!!」

慌ててハンナの方を見ると、憤慨して未だに倒れている男に掴みかかるうと息巻くハンナの姿と、それを押える亭主の姿があった。ほっとして一氣に力が抜けた翠は、右手にたくさんの光珠が纏わりついているのに気付く。

《いたそう、いたそう》

泣き出しそうな声で、少しでも癒せないかと赤黒くなった手首を覆う光珠に、また心配を掛けてしまったと悲しくなる。

項垂れる翠の腕をそっと掴む手があった。

「……見せてみる」

そのまますぐ傍の椅子に翠を腰掛けさせると、ごそごと荷物の中を探り、小さな容器を取り出す。

「大人しくしている」

さっと退いた光珠が覆っていた部分に、深い緑色をした葉を塗りこみ始めた。ひやりとした感触に翠が身を竦めると、勘違いしたのか、葉を塗る手付きがさらに優しいものになる。

「有難うございました。えっと……」

馴染んだ顔とはいえ、その名を知らない事に翠が言い淀んでいる。ああ、とばかりに常連の男は頷く。

「ガイと言う」

「ガイさん。……本当に有難うございました。私はスイって言いませう」

互いに今更ながらの自己紹介を行うと、先程まで心配そうだった瞳が、今度は咎めるように翠を射抜く。

「あれは、無謀というものだ」

「はい……」

反論の術もなく、翠がさらに項垂れていると、ガイの大きな手が頭の上に乗せられる。

「だが……頑張ったな」

俺も助けに入るのが遅くなって悪かったと続けるガイに、翠は必死に首を振る。

「遅くなんて!!それに、治療までして頂いて……」

くるり、と丁寧な巻かれる包帯に翠が感心していると、ガイは手早く処置を終え、何事もなかったかのように立ち上がる。

「——こいつは連れてゆく」

まだ昏倒したままの男を軽く担ぎ上げ、ガイはそのままハンナの元へ向かい、勘定を求める。

「何言ってるんだい!お礼くらいさせとくれよ。……今度は、良い酒もつけてやるよ」

「……酒は、苦手なんだが」

いくらでも飲めそうな顔をしているのに、そう呟いた男に周りの常連も笑い声を上げる。

「あんなに強いのに、酒には弱いのかいアンタ」

ハンナもまた、大笑いしながら馴染みの男の背中をバンバンと遠慮も無く叩く。それにやや無然としながら返した男の言葉に、その場が一気に静まり返る。

「……記憶にはないが、笑い続けるらしい」

「……………」

無駄口一つ叩かない、無口、無表情が代名詞のこの男が笑い続ける姿——。

ひくり、と皆顔を強張らせ、その恐ろしい光景を目にしたい勇者

はいないのか、それ以上^{から}揶^かう声は上がらなかった。

第14話 優しい戒め

「アンタも大変だったねえ……ここは良いから、今日はもう部屋に帰りな」

ガイが妙な沈黙を最後に落とし立ち去った後、翠とハンナは倒れた椅子や卓を元に戻していった。

さすがに皿の幾つかは駄目だったが、家具が壊れて無かった事に安堵しながら、一つ一つ位置を直し終えると、翠はハンナに促されながら部屋へと戻る。

少しばかり店を亭主に任せたハンナも、汚れてしまった服を着替えようと自室のある二階へと翠と共に向かう。

その間に、巻き込んでしまったハンナへと、翠は先ほどの男との一件を説明していった。

「ごめんなさい、私の事情に巻き込んでしまって……」

「アンタが悪いわけじゃないだろう？ 気にしなさんなって。女性に乱暴を働くような男は肘鉄くらって当然だ」

ちよつとばかり、やりすぎだったかもしれないけど。などと、すまなさそうに項垂れる翠を笑い飛ばしながらハンナは告げる。

でも……と僅かに硬い顔をして、ハンナは後ろを歩いていた翠を振り返る。

「まあ、余計なお世話かもしれないけどさ……。スイ、アンタはもうちよつと人を頼った方が良いんじゃないかい？」

「え……」

「前の時は仕方なかったのかもしれない。けどここには、いっぱい人が居た。うちの旦那も、アタシもいた。それに、お客さんにも腕に覚えがありそうなのが多いだろう？——自分で何とかしようと頑張るのもいいけど、助けを求めることも、大切なんじゃないかい？」

「……………は、い」

瞳を伏せ沈んだ雰囲気、翠の肩を、ハンナはそっと撫でる。

「いいかい、一人で出来る事には限りがある」

「はい……」

神妙に頷く翠に、ハンナはぽつりと呟いた。

「それにね。——助けてと言ってももらえないのも、寂しいもんなんだよ」

「……っ」

俯いていた翠が、その言葉に顔を上げると、そこには言葉通り切なそうな顔をしたハンナの姿があった——。

こんな顔をさせるつもりじゃなかった。

ただ、思いつかなくて。……誰かに助けてもらおうなんて、考えられなくて。遠慮や、都合の良い時だけ頼る事への自己嫌悪でもなく。本当に翠は助けを求めるなど、思いもしなかったのだ。

——ましてやその行為が、人を傷つけてしまうなんて、思いもしなかったのだ。

目の前にいるハンナも、今もまた翠の右手にそっと絡む光珠も。こんなにも優しくしてくれる存在を、自分は傷つけてしまうことしかできないのか。

「ごめん、なさい……」

やはり、自分が大切に何かを思っではいけないのだと、大切に生きて貰ってはいけないのだと。

そっと身を引こうとする翠に、ハンナは肩から手を離し大きく溜息を吐く。

「スイ、あんたは何が悪いのかわかっちゃいないね」

ハンナの言葉に、翠が小さく首を振る。わかっている、こんなに甘えてしまったのがいけないのだ。自戒していたつもりなのに、温

もりを求めてしまったから……。

「いや、わかってない!」

ぐい、と一步身を引いた翠の両肩を掴んで引き寄せると、ハンナは伏せようとする翠の目を見据える。

「いいかい、スイ。アンタが何を怖がっているのかなんて、あたしや知らないけど。そうやってあたしらからも逃げて、そうして……一人になって、何が残るんだい」

「……」

一人だけど、独りじゃない。コウも、バルドルもいる。そう思うのに、翠はハンナの顔を真っ直ぐ見返すことが出来なかった。

「……言いすぎちゃったかね。……でもね、スイ。これだけは約束しな。また今度、自分ではどうしようも無いような事があったら、ちゃんとアタシらを思い出しとくれ。そりゃまあ、長い付き合いって訳じゃないけど、縁あってこうして一緒に暮らしているんだ。――

もう、他人じゃないんだよ」

第15話 呼び声

（もう、他人じゃない——）

その言葉が、翠の頭を占める。どんなに心に線を引こうとしても、思う通りに心は従ってはくれない。

ぐるぐると、今まで大切だった人、今大切に……思ってしまった人、皆の顔が駆け巡る。ハンナの言葉に、すでに自分が人を受け入れつつあった事に気付く。

（どう、しよう……）

情け無いのか、悲しいのか、怖いのか、嬉しいのか、自分で自分の感情が判らない。

「……大切な人を作っちゃ、駄目、なのに」

着替えることもせず、寝台に座り込んだまま翠が思考の海に沈んでいると、つい、と鼻先で光珠が震える。それに意識を現実に取り戻すと——

（——呼ばれてる）

知らない感覚なのに、当たり前前にそう感じた。

それを肯定するように、くると一回転した光珠が翠を促すようにその全身を包み込んで行く。温度など感じるはずがないのに、暖かく感じられるその光に優しさを感じる。

何度も、何度もコウにはこうして慰められてきた。それなのに——何度も、悲しませてきた。

柔らかな光に包まれ……翠はこのままじゃ駄目だと唇を噛む。

ハンナだけじゃなく、コウも、そして今——私を呼んでいる、バルドルも。

失う可能性に怯えるままの自分でいたら、いつか優しい皆を酷く

傷つけてしまうだろう。

そんな確信ともいえる予感がした。だから――

「強く、ならなきゃ」

言葉にしてしまえば、それは決意となる。翠はしっかりと眼前の闇を見据えると、銀色の光に包まれ窓から身を躍らせた。

二階にある自室の窓から、光珠の助けを借りてゆっくりと舞い降り、毎朝通る路^{みち}を通り過ぎる。

すぐ隣にいても、誰とも視線が交わらない感覚は久し振りだった。身を隠してくれている光珠に小さく有難う、と囁く。ほわりと全身を取巻く銀色の光が薄紅色に変わるのを見るのも久し振りだ。

大通りを過ぎ、次第に人気の無い方へと導かれ進んで行く。

足を進める度に、心の中に響く呼び声も近くなり、バルドルに近づいて行くのを感じる。

夜も更け、静けさを増した街を駆け抜けてゆく中、翠はふと視線を感じる。

振り返ると、いつの間に着替えたのか、普段店に来ている時とは違い、闇に紛れるような漆黒の衣装に身を包んだガイがこちらを向いていた。

こちらが見えるはずがないのに、何故だかその黒い瞳は、完全にこちらを見ているように感じた――

制服のような、ガイのその姿を見ていると何かを思い出しそうになったが、翠はさらに強くなるバルドルの呼び声に背を押され、その場を後にする。

それが、大きな変化への第一歩だとは知らずに――。

「バルドル!!」

夜の闇に、その身を溶け込ませるような黒竜を見上げ、翠は弾むような声を上げる。

《会いに来た。——翠》

深い森の木々の間から零れる、僅かな月の光にその鱗を輝かせたバルドルに翠が駆け寄ると、その長い首を下ろし、挨拶代わりのように翠の頬を大きな舌でぺろりと舐め上げる。

「会いたかった」

くすぐったい感触に笑いながら、翠もまたバルドルの鼻先に軽い音を立てて口付ける。

バツタバツタと揺れる尻尾が近くにあった木に大きな音を立てて当たり、ハツとしたようにバルドルがその動きを止める。

「……………っっ!!!」

なんっ、て可愛いの!!!! 翠が内心悶えていると、ひょいとその身体を掬われ、気付いた時にはバルドルの両手に捧げ持たれるような形になっていた。

《其方に会えぬ時間は、長う感じられた……》

すり、とその首を翠の頬に擦り付けてくるバルドルを受け入れるように、翠はその長い首に手を回す。

長い抱擁の間に、冷たいバルドルの肌が、翠に温められてゆく。

グルル……と甘えるように喉を鳴らす度に、翠はその小さな手でバルドルの首を撫でる。

そうやって言葉よりも触れ合いで、会いたかった気持ちを伝え合っている、漸く満足したのか、バルドルが僅かに身を引き、久方振りの翠の姿を見詰めてきた。

《少し、良き表情かおになったな翠》

第16話 決意

バルドルの言葉に、翠は晴れやかに笑う。

「うん……決めたんだ。わからない未来に怯えるんじゃなくて、手を伸ばしてみようって」

怖がってばかりいたら、今この手の中にある大切なものさえ傷つけ、失ってしまうだろう。

ようやくそれに気付いた翠は、バルドルの鼻先に頬を寄せる。

扉の前で別れた時には合わせられなかった瞳をしっかりと合わせ、翠は安堵したように目を細めるバルドルに自分の心を伝えた。

《……頑張ったな》

優しい、優しすぎる響きのバルドルの声に、翠はぼろりと涙を一粒だけ落とす。

「……っ、あり、ありがとう」

心配を掛けていただろうバルドルに、翠は謝罪ではなく、その言葉を返す。

失う恐怖に怯え、立ち竦む翠を見守ってくれてたバルドル。

そして、立ち止まったままでもいいとする翠の背を押してくれたハンナ。

いつも傍にいてくれて、翠が傷つく度に心配してくれたコウ。

人馴れしない翠を、辛抱強く構ってくれた酒場の人々。

沢山の優しさが、一滴ずつ翠の心に染み入り、本人ですら気付いていない内に、他者を拒むその壁を崩してきたのだ。

自分だけで完結することのできない、見知らぬ世界での生活故のものもあっただろうが……今なら、あの時のバルドルの言葉を受け入れる事ができる。

「この世界で、いっぱい……新しい縁つてものを、作って行こうと思う」

もし、その新しい縁さえも失ってしまいかけたとしたら、今度は手を伸ばそう。

自分といたら不幸になるなんて言い訳と共に、ただ失うのを見ているのではなく、力の限りこの手を伸ばし、掴み取ろう。

諦めることばかりを覚えるのではなく、欲しがる事も覚えよう。

強欲だと言われてもいい。大切だと思えるものを、沢山作ろう。

《え……スイ、僕らだけで良いって言ってくれてたのに……》

ちよつと拗ねたような声が、すぐ傍らでする。その言葉は本心からのものだったし、こんな言葉を聞いたら大好きなコウが相手なだけに、揺らぎそうになる。でも。

「ごめんね、コウ。私我儘になることにしたの」

ここで悪いと思って、元の自分に戻ってしまうなんて事はできない。

自分から言った約束を違えてしまうことに、ちくりと罪悪感を抱いていると、きやらきやらと楽しげな笑い声が木霊する。

《冗談だよ!……僕らだって、スイに一人で居て欲しいなんて思わないよ》

ちよつと、惜しいけどね。そんな風に言いながらも、嬉しそうに翠の周りをくるくる回る光珠に、翠もつられるように笑い出す。

「私も、ちよつと惜しいわ」

バルドルとコウ、それだけの世界でいるのも幸せだったろう。膝を抱え、優しさに微睡まどろむような世界。怖いものも、悲しいものも無いだろう世界。でもそんな世界で目を閉じたままでいることは――
――生きるとは言えない。

幼い頃、大切な宝物をどんなに丁寧にしまっていたても、それが色褪せてしまったように。閉じたままの世界では、その関係さえも歪めてしまうだろう。

今まで以上の痛みや悲しみもきつとある。再び大切な人を失うことも。けれど、その苦しさから目を背けず立ち向かっていかないと――
――得るものもないのだ。

第17話 魂結び

——穏やかな時が過ぎてゆく。

バルドルと別れてからの事。目新しい町での生活の事。酒場の人々、大らかなハンナや、無骨だが優しいその旦那、そして馴染みとなったお客さんや、ガイの事。楽しげに翠が今までの事を話していると、グルウ、とバルドルが低く唸る。

《——我が半身は何をもたもたして居るのだ……》

「ん？どうしたのバルドル」

唸り声で、バルドルの呟きを聞き漏らした翠が問いかけるが、何でもないとはかりに目を伏せるバルドルに、それ以上深追いする事は無かった。

《善き者達と、巡り会ったな翠》

「……ええ」

その幸せを噛み締めるように頷く。そんな風に静かな会話を続けていた翠が不意に、思い出したようにバルドルを見る。

「そういえば前に、バルドルには私の居場所が判るって言ってたけど、今日なんとなく感じたよ」

呼んでる、って感じだった。翠が一人頷きながら告げると、さもあらん、とバルドルもまた頷く。

《其方は我が伴侶故。……契約半ばとはいえども、我との儀は完了して居るからの》

「え？半ば……って、終わってなかったの？」

花嫁などと呼ばれたあの時に、全て終わってしまったのだと思っていた翠が目を見開く。

《其方は未だ、我が半身——ジークハルトと儀を交わして居らぬ》
「そういえば、二人で一人だもんね」

《是。……契約を成せば、魂たまが結ばれる》

「魂が結ばれるって……どういうこと？」

《我とジークハルトに近き関係ものだ。余りに距離を置けば適わぬが、魂を分かつ我ら程ではないが、その存在を感じ取ることが出来、僅かながら……感情も伝わる》

「……………」

初耳のその内容に、翠の顔が引き攣る。何だろう、この恐ろしい契約は。

「そ、それって……破棄、なんて事は……」

そこまで言いかけ、翠は慌てたように破棄なんてしないから!!と続ける羽目になる。翠と居ることで、ほわほわと幸せオーラを発していたはずのバルドルが、余りにも悲痛な雰囲気で首を落とすのだから。

思わず、捨てないから!と言いかけた翠の目には、先ほどのバルドルは、今にも捨てられそうな子犬の如き姿だった。

(でもこれって……精神的ストーカー……?)

つい、こう思ってしまったても仕方がないだろう。遠い目をした翠に追い討ちを掛けるように、ふと顔を上げたバルドルが更なる爆弾発言を落とした。

《……翠よ、ジークハルトが此方こちらに向かって居るようだ》

第17話 魂結び（後書き）

今回かなり短いのですが、キリがいいのでとりあえずここで（・ω・）
ちなみに、もちろん婚姻契約破棄できません（あ

幕間 報告 Side ガイ

翠がバルドルとの再会を果たすより、幾許いくばくか時を遡り——そこ
は、リインデイルの首都、ヒース。

「……………」

吸い寄せられるように、ガイは視線を上げた。

そこには、常の町の喧騒以外には何も映らない。時間が遅いこと
もあり、疎まばらに人が歩いているだけで、これといっておかしなもの
はないはずなのに、違和感を感じる。

（——この気配には覚えがある）

膜を一枚隔てたような気配。以前、突然立ち止まった陛下の先に
感じた気配と同じモノだった。悪意は感じないものの……不審な気
配に、短剣を投げつけてみたが、これといった変化は無かった。

やはり違和感を感じていたのか、陛下に城内の探索を命じられた
が、不審な出来事は起きはしなかった。——いや、あったか。

竜癒の間へ向かいつつ、謎の気配の探索を打ち切った陛下が、そ
のすぐ後に探索を命じたのは竜珠の姫。ならば、この気配は——

何もない空間を、見据えるガイの瞳が一つの確信を築き上げよう
としていた。気配を追おうと足を踏み出しかけたガイに、背後から
声が掛かる。

「ガイ様！先程の男が落ち着いたようです」

「——解った、すぐに向かう」

確証のないものより、先ずは目の前の事柄から片付けよう。ガイは先ほど酒場より連行した男の方へと向かう。

「……何故、あの様な真似を」

淡々と感情を交えず問いかけるガイに、苦々しい顔をした男は無言を通す。

ガイが酒場から連れ出し幾許いくばくもせず目を覚ました男だが、眩暈や吐き気にとてもじやないが質問を出来る状態ではなかったのだ。

漸く眩暈から解放された男に幾度問いかけても、憮然と腕組みをしたまま口を開こうとしない。

「もう一度、眠りたいか？」

何度も衝撃を受けてしまえば、後遺症が残るらしいがな……と何でもない風に告げるガイに、屈強なはずの男が青褪める。己が脅したというのに、今までのだんまりが嘘のように、青褪め捲くし立てるように弁解する男の姿に呆れてしまう。

だが、静かに男の言い分を聞いていたガイが、翠へと狼藉を働いた原因の件で、僅かに眉を寄せる。

「妙な格好……？」

「ああ、変な格好した女が裏通りをうろろうしてるって言うからよお、押揃ってやるつもりだったんだ。……そ、それだけのつもりだっんだ！」

勝手に弁解までしているが、その姿が余計に男に下心があった事を露呈している。やはり、少しここで頭を冷やして貰ってもらおうと決めたガイは、未だに言い訳を繰り返している男をその場に残し、隣室へと向かった。

「……陛下からの件、進捗はどうだ」

報告を纏めている部下に声を掛けると、分厚い書類が手渡される。そこには、意外なほど多くの名前が載せられていた。他の民族の流れを汲むのか、容貌の異なる者、身元不明の者、不思議な習慣を持つ者、大きな差異から、小さなものまで、それは多岐に及んでいた。

「なかなかですね……一番怪しいのは、陛下から命を下された当日、あちこちで見かけられた見慣れぬ服装の少女なんです……ここいらで、ぷつりと足取りが途絶えてるんですよ」

指し示された界限には、覚えがある。

「この辺りで、リストに上がったものは居ないのか？」

「ああ、居ますよ……あったあった、こちら辺です」

数枚抜き取り、差し出された書類を受け取る。素早く視線を走らせていると……よく知った名前がそこにはあった。

「この者は……？対象外とチェックされているが」

「この女性ですか？ええ……少しここいらでは見かけない風貌だったので、リストに上がったんですが……。この酒場の女将さんに事情を伺ったところ、以前から働いていたとの事でしたので……」

何か問題が？と問いかけて来るのを冷ややかに一瞥する。

「騙りや、庇っている場合もあるだろう。聞き込むなら他の人間にもあたり、裏付けを取れ。でなければ何のための捜査だ」

「すみませんっ！！洗い直します！！」

最もな言い分に、背筋を伸ばした部下に首を振る。

「不要だ。……もう見当は付いた」

「ガイ様……？」

「陛下にお会いする」

椅子に掛けていた外套を纏い、ガイは城へと足を向ける。

（彼女があのお店で働き始めた日付——それは、書類にあるようなものではなく、陛下の命を受けた、翌日からだ）

ハンナの酒場で毎日のように夕食を取っていたガイだからこそ知

り得た事。

余りにも彼女が——スイが、懸命で。その姿が心配で見詰めていた為、陛下からの勅命と繋げることが出来なかった。

けれどこれで全てが繋がった。

余りに常識知らずな少女、縋るものが他に無いかのように、必死に働いていたその姿。店で暴れた男の証言、そして——先ほど引っ掛かりを覚えた、回廊で感じたのと同じ気配は……酒場の方角から現れた。

全てが違和感無く繋がる。……繋がって、しまった。

最近漸くぎこちない笑顔を自分に向けてくれるようになったスイの姿を思い出す。

他の者に向ける、綺麗に取り繕ったものではない、不器用な笑み。その笑みを向けてもらえる事に喜びを感じ始めたのはいつだったろう……。

次に出会うとき、もうその笑みは見せてもらえなくなってしまうのだろうか——

（報告に、向かわねば）

あれほどまでに、竜珠を求めている陛下。そして、自分はその臣下だ。命に背く事は出来ない。それ以上に——竜珠を得る事が出来ず、苦しむ姿を長年傍で見ていたのだ。

自分の感傷で、その存在を隠す事など出来はしない。けれどガイは、城へと向かう己の足取りが、酷く重く感じられたのだった……。

幕間 確信 Side ジーク

「——以上で、報告を終わります」

その言葉を最後に一礼したガイに、ジークハルトは小さく頷く。

「その、翠と思われる人物が向かったのはエーリカの森か」

「はい」

「……これより、その森へと向かう。ガイ、着いて来い」

無言で報告を聞き終えたジークハルトは、それだけ告げると立ち上がり、その場を後にしようとする。

「陛下！まだその者が竜珠の姫だというわけでは……」

セルジオがその背を追いながら、ジークハルトの浅慮な行動を諫める。

「我が半身の気配がその方角に在る」

「……ならば、私も参りましょう」

ジークハルトの言葉に、セルジオもまた外套を手にし、ガイと並び歩き出す。

「スイを……いえ、竜珠の姫を、あまり追い詰めませぬよう」

普段余計な口を挟まないはずのガイの言葉に、歩みを止めぬままジークハルトが振り返る。怪訝な表情で己の側近に詰問する。

「あれに、情でも移ったか」

報告の中で、翠の働く場所にガイが訪れていた事は触れられていたが、その関係性までは語られてはいない。

ジークハルトは、らしくないガイの行動が翠への感情故のものだという事、それ自体に不快感を感じる。

（——こちらは、未だ逢うことさえ適わぬというのに）

理不尽な考えだと自覚しながらも、湧き上がる感情までは止めら

れない。

「……解った、善処しよう」

問いに無言を返すガイを一瞥すると、それだけ返しジークハルトは口を噤む。……口を開いてしまえば、ガイを筋違いにも責めてしまいうだった。

厩舎へと向かい、自らの愛馬を呼ぶ。

ジークハルトを取巻く竜の気配を感じ取るのか、大抵の馬はジークハルトに怯える。それを一蹴するほどの馬などそうは居ない。

それを成しえたのはただ一頭。けれどその気性は荒く、主以外の者が近寄る事を許しはしない。

「——駆けるぞ」

唯一の主の言葉に応え、嘶いななききを返し、その色さえも詭あつらえたような黒馬は、その背に主を乗せた。

軽く腹を蹴り合図をすると、その黒馬は意を酌んだように、その俊足を見せ付ける。

遅れまいと、続いてセルジオとガイがそれぞれの馬に跨り、その背を追う。けれど、足の差は歴然としていてその距離はじりじりと引き離される。

「お待ち下さい!!」

国内とはいえ、単騎で駆けるなど無謀すぎる。ガイは無言で馬の足を速め、セルジオは声を張り上げ、ジークハルトに注意を促す。

——セルジオの声は聞こえていた。けれど、逸る心を静める事が出来ない。

速度を抑えねば、他の馬では後に続けない。判ってはいても、こ

の先に求めるものが在るというのに、足を緩めることなど、出来よう筈がない。

「先に向かう」

「陛下!!」

セルジオの声を背に、ジークハルトはさらに速度を上げる。後々のセルジオの長い説教も、ガイの咎めるような視線も甘んじて受けよう。

ジークハルトは、こと竜珠が絡むと自制を失う己を自嘲しながら、感情の赴くままに馬を走らせた。

「……………」

深い闇に沈むエーリカの森。その入り口に辿り着いたジークハルトは、馬の背から降り、その手綱を引きながら、森の奥へと向かう。未だに二人は追いつけないのだろう。木々のざわめきと、近く遠く聞こえる生物の声。その音だけが周りを取巻く。けれど——ジークハルトは己の半身の気配を感じる方向へと真っ直ぐ足を向ける。一步、一步踏み出すこの足が、己の竜珠の許へ繋がっているのだ。

（今度こそ——）

期待と共に開いた扉の先に、その姿が無かった記憶は新しい。二度と味わいたくない、あの思い。

ジークハルトは、恐れにも似た気持ちを抱きながら進んだ先に——こちらを振り返る、長い黒髪の女性の姿を見た。

第18話 困惑

バルドルの言葉に、深呼吸すると——意を決して、身に纏っていた光珠を解き放つ。

ふわりと光が小さな塊に分かれたのと同時に……背後で小さく枝を踏む音が聞こえる。

「……………」

翠がゆっくりと振り返ると、そこには何度か目にしたジークハルトの姿が映った——。

無言のまま、お互いに相手の姿を見詰める。

(……これは、けっこうクルわね)

今までは互いの間に必ず何かを介していた。泉や光珠……けれど、こうして直に向き合うと、初めてバルドルと出逢った時と同じ様に、自然と惹かれる感覚が沸き起こる。そっと抱き締め、貴方は独りでは無いのだと、私が傍にいるのだと伝えたい衝動。

自分の意思では儘ならないその感情こそが、自分が竜珠ゆえんと呼ばれる所以だと理解する。

ジークハルトもまたそうなのか、鋭かった眼光が次第に柔らかなものに変わってゆく。愛おしそうに目を細め、翠に手を伸ばし……告げる。

「我が名はジークハルト、我が竜珠よ、貴女も名告なのってはくれないか」

熱を帯びた声、翠ただ一人を見詰める瞳。僅かに擦れた声は低く、心地良い。

伸ばされた手は男性らしく筋ばっていて、指先は剣を扱うせいか、僅かに節くれ立っていた。

均整のとれた体軀はよく鍛えられ引き締まっていて、その顔は滴るような色気を放っていた……。

そんなジークハルトの、焦がれ、熱に浮かされたような声音に翠は――

（ない、これはない）

無情にもそう思う。

惹かれる感覚はある、けれどそれはこうも情熱的なものではない。と、いうか……まず出逢ったその瞬間、プロポーズとは如何いかになものだろう。バルドルと婚姻してしまったのは、翠に知識が無かったからだ。解った上で、相手の性格も何もかも知らないというのに――結婚しろと？

そもそも、バルドルと婚姻を交わすのとは訳が違う。

人同士で結婚しておいて、何事も無く済ませる訳にもいかないだろう。

惹かれ、大切に思う気持ちは翠にもあるが――どうにも互いの間には大きな温度差があるようだ。バルドルと契約を交わした以上、翠に選択肢など無いのかもしれないが……すぐに受け入れられる話ではない。

翠にしても、漸く人と接触を持とうと決めた事で精一杯なのだ。そこへこんな重い感情を受け入れる余裕は流石に無い。

「スイと申します。――ジーク」

「……………」

真名で名乗らず、呼ぼうとしない翠に、ジークハルトの表情が陰しさを帯びる。

「違う、翠。真^{まこと}の名を——」

「物事には順序があるとは思いませんか？ジーク」

真名で呼ぶつもりは無いのだと、はつきりと思いを示す翠に、和やかだった空間が一気に張り詰める。ジークハルトが伸ばしていた手を下ろし、何事か口に乘せようとした瞬間——その場の空気を壊すように、駆け込んできた人物を見て、翠が目を見開く。

「ガイさん！？何でここに……」

「……スイ……」

驚きに目を見張る翠に、ガイが一瞬苦しそうに目を伏せるが、すぐに居住まいを正し、跪く。

「——長き時、お待ち申し上げて居りました、竜珠の姫」

地に膝を付くその姿と、その言葉に翠は一瞬言葉を失う。戸惑ったように視線を泳がせる翠に、ジークハルトが険しい表情のまま答える。

「その者は、我が臣下。そして——翠、貴女の居場所を伝えし者」

第19話 赦し

ジークハルトの言葉に、その場が静まり返る。

ガイは体勢一つ変えず、その場に跪いていた――。

何一つ語らぬその姿をただ眺めることしか出来ない翠は、瞳を合わせてくれないガイに戸惑いを感じる。

言葉少ないこの人は、何よりもその瞳でその感情を伝えてくれていたというのに――

ただ一度だけ助けてくれただけの存在。

けれど、その行為以上に日常でガイが与えてくれていたものは大きかった。視線が合う度に心配そうな視線を向けてくれていた。そんなガイが……。

翠も自分の事は何一つ話してはいないのだ。憤る事など出来はしない。

……それに、自分の弱さに立ち向かうと決めたばかりだ。丁度良い機会だ。そう頭では思うものの――微かに感じる胸の痛みは誤魔化せない。

自然と俯いた翠の目に映りこむガイの姿。逸らしてしまいそうになった視線を過ぎたものに、波立っていた心が次第に落ち着いて行く……。

「そう、なの……」

硬い翠の声にも、ガイの姿は微動だにしない。けれど――

翠の瞳に映る、ガイの手は真っ白になるまで力を込められていた。顔も上げず、何一つ弁解しないけれど、一度気付いてしまえばその姿さえガイの心を伝えるようだった。

「ガイさん、顔を上げてくれませんか？」

いつもの、ぎこちない笑みを浮かべながら翠はガイの目の前に己もまた跪く。その行為に驚いたのか顔を上げたガイの顔をみて、予想は確信へ変わる。

「……そんなに、責任を感じないでください。貴方は貴方の仕事を全うしただけじゃないですか」

表情は変わらなくとも、いつもこの瞳でガイと会話していた翠には、この瞳を見てもなおガイを責めることなど出来はしない。

「そんな顔、しないで下さい……ガイさん」

こんな、己を責めるような瞳を見ていられない。今こうしてガイの気持ち伝わるように、この下手な笑顔に籠めた思いを汲み取ってもらえるだろうか。

翠は精一杯の笑みを浮かべたまま、ガイとしつかりと視線を合わせる。

戸惑ったように、僅かに揺れたガイの瞳が……一瞬の間を置いて、見慣れた穏やかなものに変わる。その事が嬉しくて、翠はさらに笑みを深めた。

「——こちらを見ろ、翠」

その穏やかな雰囲気破るように、ジークハルトの険しい声が翠の背に掛けられる。

ガイを促しながら、ゆっくりと立ち上がった翠が振り返ると、声と同じ様に険しい表情のジークハルトがこちらを見据えていた。

「その者を赦せるのか？」

そんな事をわざわざ問いかけるジークハルトに、笑顔の名残を残していた翠から、すう、と表情が抜け落ちる。

「赦すも赦さないも、私はそんなお偉い立場じゃない。それに……そのどちらかで言うのなら、赦すとしか言えない」

「……貴女は、どう見ても我が許から逃げようとしていた！……裏切られたとは思わぬのか！」

苛立ったように告げるジークハルトに、翠が言い返そうと口を開いた途端――

「何を仰おっしゃってるんですか、陛下」

今まで一切口を開かなかったセルジオが、冷やかな声を放つ。

「セルジオ……」

その口調に何かを感じたのか、ジークハルトの勢いが衰える。

「ジーク陛下、貴方は何をしたいんですか？何の話もせず、突然に儀を交わそうとするわ、ガイを貶めようとするわ――スイ様に嫌われたいんですか？」

声とは裏腹の満面の笑みを浮かべる姿に、つい一步下がった翠にセルジオの視線が向けられる。びくりと身を竦める翠に、セルジオが歩み寄る。

「……」

笑顔なのに、何だか怖い。翠がじりじりと後ずさろうとするより早く、目の前に立った男は優雅に一礼する。

ガイのように跪かれなかったことに安堵した翠もつられるように頭を下げる。その姿に目元を緩めたセルジオは、ジークハルトへ向けたものとは違い、穏やかな声で自己紹介を始める。

「初めまして、スイ様、私はジーク陛下のお傍で仕えて居ります、セルジオと申します。この度はこのバ……いえ、陛下が失礼な事を」「い、いえ……。こちらこそ初めまして、スイと申します」

謝罪しながらさり気無くジークハルトを貶しているセルジオに、翠は顔を引き攣らせながらも丁寧に戻す。

「ご丁寧にどうも。――ガイは、陛下の命により、竜珠の姫を探していたまでの事。彼に責は有りません。……解って頂き、有難う御座います」

「いえ……探させてしまった私も悪いんです……」
首を振りながら、答える翠に、セルジオは相変わらぬ満面の笑

みで、一刀両断する。
「左様でございますね」

第20話 一件落着？

「貴女様をお探しするのに、このガイを含め、多くの人間が動きましました。……ですが、これはこちらの言い分ですね。スイ様の選択は、今の陛下の様子を見るにつけ、結果的には正しかったと思いますよ」
逃げ出した事を責められると覚悟して身を硬くしていた翠だが、最後のセルジオの言葉に目を見開く。

「……スイ様は、最大の責任は既に果たされた。陛下の半身に名を与えて下さった事には感謝致します。本来であれば、後は陛下とその半身と、時折お会いして頂ければ問題はありません。まあ……城を出られるのなら、一度陛下とお会いされてからにして頂きたかったです……その場合、城から出してはもらえなかったでしょうね」
深い溜息を吐いて、長い髪をかき上げながら、セルジオは再び冷たい視線をジークハルトへ送る。

「竜珠の姫を長年求めていた姿をずっとお傍で見て来ましたが……いくら何でも、ここまで思慮が浅かったとは。何ですか貴方は。子供でもあるまいし、自分の嫉妬心で相手を傷つけるような発言をするなど……」

嘆かわしい、と言わんばかりに再び溜息を吐く。

「……………」

渋い顔でセルジオを睨むジークハルトに、セルジオは反省が無いとさらに視線を冷たいものに変える。

そんなセルジオを戸惑ったように見ていた翠が、おずおずと冷気を放つセルジオに問い掛ける。

「ええ……っと、私出ても良かったんですか？」

「大丈夫です。お二方が暴走しない程度に顔を出して頂ければ問題はありません。後は陛下と貴方様の問題です。まあ……監禁しかねない馬鹿者が約一名居りますが、そんな事、私がさせはしませんよ

？」

爽やかな笑顔で断言するセルジオに頼もしさを感じると共に……こんな暴言が許されるのかとこちらが心配になってしまう。

「それは、助かりますが……いいんですか？」

ちらりとジークハルトを見遣る翠に、言いたい事が解ったのかセルジオが頷く。

「私とガイは幼い頃より陛下のお傍近くで仕えていたのですよ。……なので、まあこの程度の言葉は懐深い陛下の事です、お怒りになることはありませんよ」

などとセルジオが語る合間にも、ジークハルトの気配は剣呑さを増しているのだが……何も言ってこない。

「それに、この程度でお怒りになる前に、己の所業を弁えて頂きたいものです」

「セルジオ、貴様……っ!!」

「何か？」

神々しいまでの笑顔を向けるセルジオに、勢い込んでいたジークハルトが詰まる。

「全く貴方は……スイ様の言い分も尤もです。段階というものを知らないのですか。関係を深めるより先に、きちんと知り合う事から始めるべきです。……なので、このままスイ様をお連れする事を許す事は出来ません。場を作る事には協力しますので、後は自力で頑張ってください。さて……スイ様」

ジークハルトに向けられていた笑顔が、今度は翠へと向けられる。「はい」

自然と姿勢を正してしまう。そうしなければいけないような雰囲気気をひしひしと感じる。

「貴女様も。少しでいいので陛下のお気持ちを汲んで頂けませんか。ガイからの報告によると住み込みで働かれていますそうですね……お休みの時で結構です。話は通しておきますので、城へと出向いては

頂けませんか？……でなければ、流石に私も陛下を抑えてはおけませんので」

お願いという形を取った命令だが、翠に異を唱える事など許されない。こくこくと必死に頷く翠に、セルジオは笑みを紳々しいものから通常のものへと変える。これで一件落着、とばかりの空気に、ただ一人異を唱えるものが。

「勝手をするな！セルジオ！！」

ジークハルトのその言葉に、せっかく落ち着いたセルジオの笑みがまた元に戻ってしまう。

「……ジーク陛下？人がせっかく物事を穩便に片付けた上に、貴方に機会も作ったというのに、何か問題でも？」

じり、と今度こそ翠は巻き込まれたくないと後ずさり、ガイの隣に落ち着く。お疲れ様と言わんばかりのガイの視線に、ようやく気を緩めていると、目の前では再びジークハルトとセルジオのやり取りが始まる。

「あれ、放っておいていいんでしょうか……」

最早対岸の火事とばかりに遠い目で眺める翠に、ガイはあっさりと頷く。

「構いませんよ、最後にはセルジオに陛下がやり込められて終わります。……いつもの事ですから」

その言葉に素直に頷き、翠は寂しそうにガイを見上げる。

「……前のように、話しては貰えませんか……？」

「竜珠の姫にあのような言葉遣いは……」

困惑するガイの情に訴えかけるように、翠はさらに寂しそうに肩を落としてみる。

「……私は、私です。それ以外の何者でもありません」

「ですが……」

「駄目、ですか……？」

ようやく受け入れる事の出来た一握りの人達。そのガイに余所余所しい態度を取られる事が悲しくて、卑怯と言われてもいいからこの一線を崩したかった。

——長い沈黙に、翠が諦めようと瞳を伏せた瞬間、重々しい溜息がガイから零れ落ちる。

「仕方無いな……わかった、スイ」

こういったことには頑なそうなガイが、譲ってくれたことに、自分で望んでおきながら翠は驚く。だが、この機会を失うつもりは毛頭無かった。よもや、最後に諦めた時の翠の瞳が悲しみに沈んでいて、ガイが見ていられなかったのだとは気付かず、今度は嬉しそうに笑みを浮かべる翠だった。

そうこうしているうちに、ガイの発言通りとなったのか、悔しうに拳を握り締めるジークハルトと、満面の笑みを浮かべるセルジオの姿があった。

「……陛下に色々教え込んだのはセルジオだ。そうそう陛下は勝てはしない」

ガイのその言葉に、一番若そうに見えるセルジオの年齢が気になったのだが……何故か聞いたらまたあの笑顔の洗礼を受けてしまうだろうと本能的に察した翠は、完全にやり込められた様子のジークハルトに、同情めいたものを覚えるだけに留めたのであった。

第21話 幼き心

「何か、嵐のようだったわね……」

セルジオに急ぎ立てられるように去っていったジークハルトの背中では疲れきっていて、少し可哀想になったものだ。翠もまた疲れたようにその場に座り込む。柔らかな下草の感触が心地良い。

《……我が半身が申し訳ない……》

翠の首筋に鼻先を押し付けながら告げるバルドルに、翠が苦笑する。

「ジークはいつも、あんな風なの？」

《其方故……という処か。あの者は我と同じく、長き時を其方という存在を得る事無く過ごして来た……。在るべきものが無いというのは、飢えを産む。漸く得た存在を欲して止まないのだろうよ……。特に、一度諦めてしまった存在を得たからこそ、尚更》

瞳を閉じ、過去を思い返すバルドルの姿に翠の胸が痛む。

——その感覚には覚えがある。

失う事を知るからこそ、翠は臆病になった。ジークハルトもまた、諦めていたものを得たからこそ、その存在に執着しているのだろう。（……今の私が、バルドルやコウ、ハンナやガイを失うことを恐れてしまっているように、ジークハルトは私を失う事を恐れているのだろう）

「でも、私にはまだ……あの感情は受け止めきれない。それ以前に、あの勢いはちよつと……」

気持ち解つても、受け入れられるかどうかは別物だ。

翠が困ったようにバルドルを撫でていると、心地良さそうに喉を

鳴らしながら呟く。

《少し、浮かれて居るのよ。更に言えば、初めての感情に戸惑って居るのよ。……今も我が半身は混乱の最中さなか》

「初めての……？って、ジークもういい年よね？」

余程の老け顔というなら話は別だけど……と翠が首を捻ると、バルドルが鼻で笑う。

《幼き者と同じだ、あれも、我も。其方という存在が無い世界で己を保つ事ばかりに執心し、何かに執着する事を覚えたばかり。己の心を抑える術も知らぬ》

すり、と翠の首筋に擦り寄るバルドルの言葉に、翠の力が一気に抜ける。

（子供同然って……ああ、そっか。それであの反応か）

今のジークハルトの反応は、幼い子供が大切な物を取られまいと必死に周りに噛み付くのと同じようなものか。そう考えると、ガイに関しての物言いや、性急すぎるほどの行動も、解りやすいものだった。

「まあ、私も人の事は言えないか……」

それを言うなら、翠もまた人付き合いを学ぼうとし始めたばかりだ。互いに見た目ばかりは成長しているせいで、それに捕らわれてしまっていたようだ。

「セルジオさんに言われたからだけじゃなく、ちゃんと向き合ってみる。その結果……どんな関係になるかは判らないけどね」

あまり構えたりせず、少しずつ互いを知ってみる事が今は何より必要だろう。

肩の力を抜いて、まずは翠が皆にそうして貰ったように、ジークハルトの不安を少しでも拭おう。そうして、互いが幼い心を成長させて——そこで漸く、色々考える余裕が出来るのだと思う。

(それに——ジークハルトは、まだちゃんと「私」を見ていない)

きっと、ジークハルトがあればどこまでに焦がれている存在は、竜珠。青木翠という個人ではない。

一度落ち着いてみれば、そんな簡単な事が理解できるようになる。バルドルだって、出逢いと同時に儀を交わしたのだ。今はこうして多くの言葉を交わし、個人として見てくれているだろうが……その時のバルドルにとっても、己は竜珠という存在でしか無かったろう。それが、少し寂しい。

《どうした——翠》

沈んだ翠の感情が流れてしまったのか、困惑したようにバルドルが問いかけてくる。

「……何でもない。色々考えちゃったけど——切っ掛けより、これからどうするかが大切なんだよね」

落ち込みそうになった気分を、引き上げる。

無条件に惹かれる感覚は翠にもわかるのだ。それに、竜珠への執着が重なり……今の状況があるのだろう。過去をやり直す事は出来なくても——未来を築いて行く事は出来る。

バルドルが大切に思ってくれている事は間違いないように無い。恐らく……ジークハルトも。

ならば、この後竜珠としてだけでは無く、翠自身を見てもらう事が何より大切なのだ。一番傍に居るコウとの関係も、始まりは似たようなものだ。竜珠という存在に惹かれ、集まってきた存在。最初から好意は感じていたが、同じ時を過ごしている間に、翠自身も、コウも次第に変わっていった。

翠を揶揄^{からか}ってきたり、名前を呼ばれて嬉しそうにしたり。ただ翠の気持ちを汲んで行動してくれていた頃よりも、今の方が近く感じる。同じ様に、他の皆とも知り合う事で生まれる何かが、きっとあ

る。

第22話 約束

「いらっしやいませ」

「……ああ」

いつもの席に座るガイの姿に安堵しながら、注文を受ける。

毎日のように通ってきていたガイが、来なくなったら……という不安がすこしばかり残っていた翠が浮かべた笑みは、いつもよりどこちなさが減り、柔らかさを帯びたものだった。

眩しそうにその笑みを見ていたガイが、いつものように頷き、その日のお勧めを頼む。

「今日は豆と魚介の煮込みです」

音を立てないように気を付けながら、熱々の皿をガイの卓に置く。トマトに近い、僅かな酸味を持った野菜で煮込まれた料理は、相変わらず食欲をそそる。

惜しいのが、翠の中ではこの野菜はトマトなので……色が黄色いのが頂けない。色彩に限ってみれば、これはパエリアだ。

複雑な表情をしている翠に気付いたのか、匙で魚介を掬っていたガイが問いかけるような目線を送ってくる。

「この食材って、味とかは似たものが多いんですが、色が妙にずれてるんですよ……」

もう既に翠がどういった存在なのか知っているガイだからこそ、言える言葉だ。ハンナもよく食材を手にして首を捻る翠の姿に不思議そうな顔をすることがあったが、さすがに理由を説明できなかったのだ。

「……そうか」

これが当然なガイにしてみれば解らない感覚らしい。

「ガイさん、それが……真っ赤だとどう思います？」

「……………なるほど」

先ほどの翠のような微妙な視線を料理に送るガイの姿に、翠は解ってもらえて嬉しいですと満足そうに頷く。

「スイ！次上がったよ！！」

「あ、ごめんなさいハンナさん！！」

ぺこりとお辞儀をして、翠は次の皿を配りに去ってゆく。その後姿を暫く見ていたガイは、こちらもまた安堵したように目を伏せる。お互いに、変わらなかった関係に口元が弧を描いていたのを、本人達だけが知らない。

「そういえば、明後日が私お休みなんですが……」

客への配膳が落ち着き、翠はガイの元に戻ってきて問いかける。セルジオと約束したから、城へと向かうつもりではあるが……さすがに正面から城へ入ることに気後れを感じる。

「入り口で、警備されている方に名乗ればいいんでしょうか？」

話を通しておくとはいわれたが、さすがに入り口では呼び止められてしまうだろう。

翠が逡巡^{しゅんじゅん}していると、説明不足だったことに気付いたガイが、申し訳なさそうに告げる。

「スイの特徴は既に伝わっているはずだ。名乗れば案内も付くようになっているはずだ」

その言葉に納得したように頷く翠に、ガイは暫く黙り込んだ後、提案する。

「その日は俺も城内の警備だ。時間を合わせてくれるなら俺が案内するが……」

「お願いします」

その言葉に即座に飛びついてしまう。人と交流しようと決めたところで、やはりまだ苦手意識は残って

いる。ガイの手を煩わせる事には申し訳無く感じるが、やはりその申し出は有難かった。

「ならば、六つの鐘が鳴る頃でどうだろうか。その頃なら陛下も余裕があるはずだ。明日セルジオにも伝えておこう」

朝には鐘が三回、昼には鐘が六回、夕方には鐘が八回鳴る。正確な時計が存在しないこの世界では、太陽や月の動きか、この鐘の鳴る音を指針にしている者が多かった。六つの鐘ということは……ほぼ昼時。ジークの方も昼食を取る時間で余裕があるのだろうか。

異論のない翠は、ガイと城門での待ち合わせを約束する。

——あの時は、姿を消して通り抜けた門を、こうして城の人と共に潜る日が来るなんて思いもしなかった。それも、こんなに落ちていた気持ちで通るなんて。

翠は食事を終えたガイを送り出しながら、この世界に來た時とは変化した気持ちを穏やかに受け止めた。

第22話 約束（後書き）

以前のピンク色の塩も、黄色いトマトもありますが、一般的ではないのでこういった反応ということ（・ω・）

……あまりに色彩違いすぎても食べる気にならないのでこの程度の差異でお許しくださいいいいい

第23話 扉の向こう

ハンナから貰った服の中でも上等の服を選び身に纏う。

「何だい、スイ。ガイさんと逢引きかい？」

「……はい？」

髪も普段より丁寧くしけずに梳り、出かける旨を告げた翠に、ハンナがそう揶揄う。

余りにも予想外のその言葉に、翠が呆然とハンナを見ている姿に今度はハンナが意外そうな顔をする。

「何だ、違うのかい？ てっきりそうかと……」

周りから見るとそう見えるのか。必死に首を振る翠の姿に残念だとばかりのハンナに、戸惑う事しかできない。

「ああ、引き止めて悪かったね、ほら、もう出るんだろう」

行って来な、とハンナに背を押される間も呆然としていた翠は、しばらく閉じられた扉を見上げていたが、約束の時間に遅れてはいけないと混乱したまま、足を走らせた。

約束の時刻に間に合ったのだろう。まだ鐘は鳴らない。

門が見える場所で足を止め、早くなった呼吸を整えていた翠が、漆黒の服を身に着けたガイの姿を見つける。

「ガイさん！」

声を掛けながら、門の方へと歩いて行くと、厳しい視線を辺りに投げかけていたガイが、目元を緩める。

「姫様……お待ち申し上げておりました」

「え……？」

丁寧すぎる口調に、翠が戸惑ったようにガイと視線を合わせる。

「陛下がお待ちです、こちらに……ああ、こちらの方は、ジーク陛

下の竜珠の姫、スイ様だ。セルジオより聞いているとは思うが、失礼の無いように」

門の内側に誘いながら、ガイは左右に控えていた門番へと翠を紹介する。

「はっ!!」

深々と礼をする二人に、翠が困惑も露にガイを見上げるが、先ほど遠目で見かけた時と同じような厳しい瞳をしているガイに声を掛けることができない。

「この回廊を真っ直ぐに進むと、陛下の御座す建物に向かいます。執務を行う室へ今回はご案内致します」

以前は中庭らしき場所を通り抜けたせいで、細かく見ることの出来なかった城内を、ガイの説明を受けながら進む。

「少々遠いですが……やはり危険を考慮した場合、陛下の姿が在る場所は奥まった部分になってしまいますので……姫様？」

大まかな間取りを説明しながら進んでいたガイが、黙り込んでいる翠に声を掛けると、その表情は強張っていた。

慣れぬ場所に緊張しているのだろうか、労わるように再度呼びかけると、翠がゆっくりと顔を上げる。

「どうなされました……？」

「どうして——そんなに、他人行儀なんですか……」

途方に暮れた顔で見上げる翠に、ようやく理由を知ったガイが僅かに表情を緩める。

「今は、私は勤務中ですので。言葉遣いが変わっていても、私は姫の良く知るガイに変わりはありません」

宥めるように目元を細めたガイに、翠も緊張に強張っていた肩の力を抜く。

「……わかりました。でも、あの……その「姫」というのはやめてもらえませんか？」

「ですが、スイ様は陛下の竜珠の姫です」

「私みたいな年の人間には見合わない呼称に感じるんですが……」

「姫という言葉に、年齢は関係ないはずですが……」

実際、高齢の女性でもその身分に応じて姫と呼ぶ事は多々あるため、何故翠が年齢を気にしているのがガイには解らない。

「そうなんですか？ ……でも、出来たら避けて欲しいです。我儘かもしれないんですが……どうも、年若い少女や、幼い子に対する言葉って印象があって……」

先日の食材の色とは違い、イメージの問題であって、上手く説明できない翠が言い澁んでいると、しばらく考え込んでいたガイが、頷く。

「わかりました。違和感を感じられるようでしたら、失礼ではありますが名前で御呼び致します。……スイ様、でしたら宜しいでしょうか」

「はい、それでお願いします。……有難う」

「いえ……」

ようやく笑みを浮かべた翠に、ガイもまた一瞬だけ柔らかな笑みを向ける。

「陛下、スイ様をお連れ致しました」

重厚な扉の前で足を止め、ガイが一声掛けて扉を開く。

少しずつ開かれる扉の間から光が差込む。

一歩退き、室内へと促すガイの横を通り過ぎた翠は——逆光でその表情は見えないものの、ジークハルトの姿を見た。

第24話 謝罪

「失礼します」

ガイを背に扉を潜り抜けると、ようやく室内に居たジークハルトの表情が判る。何故かその顔は強張っていて、怪訝そうにしながらも、翠は丁寧^{ていねい}に挨拶をする。

「先日は碌^{ろく}に挨拶も出来ず、申し訳ございません。お忙しい中お時間を頂き有難うございます」

「いえ、こちらこそ。足を運ばせてしまい申し訳ありません。丁度これから昼餉^{ひるげ}の時間ですので、スイ様も一緒に如何ですか？」
和やかにセルジオが返しながらも、部屋に一人控えていた者にその旨伝えると、年若い青年が出て行き、その場は見知った者ばかりとなる。

「さて……まずは、謝罪を致します、スイ様」

突然に居住まいを正したセルジオに、翠が息を呑む。

先日のような丁寧なものではない、真摯なそれにどう返して良いのか戸惑う。そもそも、何に對しての謝罪なのか。ジークハルトの失言に関してはセルジオは先日既に謝罪をしているというのに――

「この世界に招きましたこと。突然の出来事にさぞかし大変な思いをされたであろう事、僅かとは言え心中お察し致します。……何もかも見知らぬ世界で、地に足を付け生活できるまで、色々と苦労もおありでしたでしょう」

「私――は、コウがずっと傍に居てくれました、し。こちらで、大切な人を得る事もできました……だから……そんなに謝らないで下さい」

「いいえ。世界が違うと言う事は、常識や風土、何もかも異なるで

しょう。同じ世界でありながらも別の国というだけで、それは異なります。界を渡るといふ事は、何もかもを一から始めなければならなかったでしょう。――何度あの時をやり直しても私共の選択は変わらず、貴女様を呼び出すでしょう。あの時、もし成功したならば……元のようにとは口が裂けても言えませんが、さすが、少しでも何かの手助けを行う心積もりで居りました」

こうして言葉にされてしまうと、戻れないと知った瞬間の喪失感がじわりと込み上げてくる。大切な存在を得て、この世界で生きて行く覚悟をつけてはいても……郷愁の念はある。

馴染んだ世界とは違うここは、吹く風の色さえ違うようで。……そんな感覚を思い出してしまうと、俯き足を止めてしまいそうになる。

近しい存在は無くとも、慣れ親しんだ世界だ。両親や祖父母の墓もある。前を向こうと思ひ目を逸らしていた事を次々と思ひ出す。

「――頑張りましたね、スイ様」

この人は笑顔で全てを表すのだろうか。先日のもともまた違う……慈愛に満ちたその笑顔に、翠はどうとう俯いてしまう。

ただ、その場その場を必死でやり過ぎてきただけだ。自分からセルジオの好意を棒に振ったのだ。他人の力ばかり借りて、今ここに居るのだ。そう思ひながらも――セルジオのその言葉に、泣き出してしまいそうになる。

潤む瞳を、奥歯を噛み締める事で留める。

「いいえ、……いいえ」

首を振り、それだけを繰り返す。

それでも、セルジオの表情は変わらない。気持ちは全て理解してもらっている不可能でも、そうやって慮おもんばってくれた事が。そしてそれ以上に、努力したのだと見てもらえた事が、嬉しい。

翠が落ち着くまで誰も口を開かず、時が過ぎてゆく。

「失礼します。昼餉の準備が出来ました」

扉の外から先ほどの青年の声が掛かった事で、意識を切り替える。
「では……遠慮なく、頂きます」

この誘いも、セルジオの気持ちの一つなのだろう。そう思えば素直に受け取る事ができた。

「ええ、是非」

にこやかに返すと、セルジオは皆を促す。この間、一言も口を開かなかったジークハルトの後に続き、皆その場所を後にした。

——先頭を歩いていたジークハルトの表情が、暗く沈んでいた事を知る事無く。

第25話 印象

「ところで、先ほど気になったのですが……コウとは、何方どなたの事でしよう」

執務中に無駄な時間を省くため、いつも共に食事をしているのだと告げるセルジオに促されるまま、皆で卓を囲む。

和やかな食事の中、セルジオのその問いに翠は一瞬首を捻る。

「コウは……この子の事です」

ふわり、と翠が手を差し出すとその掌の上で楽しそうに光珠が弾む。不思議そうにその手を見る面々に、漸く意味を悟る。バルドルの瞳には光珠が見えていた事で失念しかけていたが、そもそもこの存在は他者の目には映らないのだった。

「光珠……と皆さんが仰っている存在です」

納得したように頷くセルジオと異なり、ジークハルトが妙に悄然しょうぜんとしていた。

「どうしました？ ジーク……陛下」

やはり一応敬称も付けた方が良さだろうか、と、翠が呼びかけるとさらに肩を落とす。先ほどから何か静かだと思ってはいたが……やけに沈んでいる。

「陛下？」

黙りこむジークハルトに戸惑いながら声を掛けるが、さらに落ち込む。どうしたら良いのだろうか、と困ったように翠が視線を巡らせると、セルジオが質の悪い笑みを浮かべていた。

「スイ様、この方は拗ねてるんですよ」

「え？ 何ですか」

談笑しながら食事をしてただけで、何か拗ねてしまうような事などあっただろうか……

翠が首を傾げていると、ジークハルトがセルジオを睨みつける。

「余計な事を言うなセルジオ」

「ほう……そうですか、なら口を噤みましょう」

そう答えるセルジオが微妙に輝いた笑みを浮かべている事から、ジークハルトのその反応は頂けないものだったようだ。

けれど、状況の解らない翠へ唯一答えを知ってそうなセルジオが黙り込んでしまうと、お手上げだった。ガイの方を見ても、小さく首を振るだけだった。

こうなっては本人に問いかけるしか無い。

「陛下、どうしたんですか？」

再度翠が問いかけると、ジークハルトが苛立ったように今度は翠を睨みつける。

「貴女には関係が無い！」

そう怒鳴りつけたジークハルトの頭が小気味良い音を立てる。

「八つ当たりは見苦しいですよ」

その光景に翠の顔が引き攣る。いくら何でもこれは……と思うが、ガイが動じて無いのを見て、これもいつもの事なのを知る。

言葉遣いだけは丁寧だというのに、その扱いは主にするものではないような、と呆然としてみると、セルジオがくるりと翠の方を向く。

「……こんな風に、この国は余り堅苦しくは無いのですよ。一応体面というものはあるので、人前では取り繕っても居りますが……王となる者はどのような身分からでも現れる。どちらかと言うと平民が多いくらいです。血筋を尊ぶ^{たつと}という風潮は余りありません。貴族と言われる者でさえ、広い土地を有している一族がそう呼ばれるようになった程度のものですから」

まあ、その代その代の竜王に阿り、優遇されようとする者は居りますがね、と締めくくったセルジオに、ここでどうしてそんな説明をされるのかがわからず、翠がとりあえず頷いていると……

「ですから、気の置けない者ばかりの時くらい、気軽に呼んで差し上げて下さい」

「……ジーク？」

まさか、と翠がそれでも一応そう声を掛けてみると、機嫌の悪そうな顔はそのままだが、すぐに応えが返る。

「何だ」

気が抜けるほど、素直なジークハルトの反応に翠の顔が奇妙に歪む。

ここまできて漸く、少しばかりジークハルトの姿が見えてきた気がする。翠としては些細と思える言葉一つに反応するさまや、見た目とは違い、やけに幼い反応。きっとジークハルトに尻尾があれば、バルドルのようにばったばったと揺らしている事だろう。

「何だと言っている」

偉そうなその口調とは裏腹に、翠の表情を見逃すまいと真っ直ぐに向けられるその視線。

「……………っ!!」

堪えきれず、翠は口元を押さえてしまう。

（か、可愛い……）

自分より遥かに年上そうなのに、そうとしか思えない。何だろう、この生き物は。

「答えよ!」

苛立ったようなその声と同時に、再びセルジオがジークハルトの後頭部を叩く音が聞こえてしまえば、もう耐え切れない。

翠はもう堪える事が出来ず、口元を押さえたまま、久々に心の底から笑った。

第25話 印象（後書き）

……最初から、こんな扱いになる予定でした、ジークさん。
私の中でのサブタイトル「ジーク受難編」でしたから！！
セルジオが出張った時から片鱗は見えていたとは思いますが
……そのうち、へたれた耳と、しょぼんとしおれた尻尾が見えると
いいな！

第26話 飾らぬ言葉

笑う翠の姿に毒気を抜かれたのか、機嫌を損ねていたはずのジークハルトが大きく息を吐くと、深く椅子に腰掛ける。

その姿に思うものがあつたのか、セルジオが不意に立ち上がり、ガイを促し部屋の外へと向かう。

「陛下、少しはお二人で話さねばならぬ事もありましょう。扉の外にはガイを置いておきますので、ごゆっくりどうぞ」

既に食事も終盤で、卓上には見事な茶器が二人分並べられる。

小振りで、中国茶で使うものと似ているが、その材質や図案は西洋風という可愛いものだった。傍らに置かれた皿の上には干した果実を酒で軽く煮たものが添えられていた。

給仕をしていた者達も、セルジオに促され扉の外へと去ってゆくのだが、今までと違い気詰まりな思いはあまりしなかった。一度見る目を変えてしまえば、不遜なその態度も可愛げがあるように見えるから不思議だ。

さらに、セルジオがその言葉を発した瞬間、翠は見てしまったのだ。微妙に沈んでいた瞳が、一気に輝いたのを。

今までならその物言いや、不機嫌そうな表情にばかり目がいつてしまっただろうが、どうやらジークハルトは結構解りやすいようだ。

「……………」

翠がジークハルトを観察している間、互いの間に言葉は無かったが翠は落ち着いて茶碗を傾け喉を潤す。

「こうして、ゆっくりお話するのは初めてですね」

香り高い茶が喉を滑り落ちると、翠はゆっくりと口を開く。

「……そうだな」

返事を返す前に、一瞬間が開く。

こうして翠が穏やかに話しかけてくるとは思わなかったのだろう。その様子に少しばかりは己の失言を自覚しているのだと知れる。まあ、先程の一件からして、まだまだその自覚は浅いものではあろうが。

「貴女は……私と二人きりは嫌なのではないか……？」

今日のジークハルトはやはり妙だ。やたらと静かだったり、突然気落ちしたり。

何度か見たように、不遜な姿であれば平気なのだが、こんな姿を見せられてしまうと何とも言えない気持ちになる。

「嫌……では、ないです」

翠の一言に勢い良く顔を上げたものの、ジークハルトの目はすぐに逸らされる。

「ジーク、何かあったんですか？」

とうとう黙っていられなくなり、翠は直球で問い掛けてみる。

碗が完全に冷え切るかと思った頃、黙り込んでいたジークハルトがゆっくりと唇を開く。

「私は……セルジオに言われるまで、貴女の気持ちなど考えもしなかった。竜珠たる貴女は私の為の存在で、傍にいたものだとは当然のように思い込んでいた。——貴女がこの城から逃げ出した時には、怒りさえ感じた。何故かなど……考えようとしなかった」

目元を大きな掌で覆い、俯き加減に告げるジークハルトの声は低く掠れていた。

「そんな私よりも、貴女の気持ちを酌む事の出来る者達の方が親しくて当然だ。そう、当然なのだ。なのに——私よりも貴女の傍にいる存在を許せない」

傲慢にそう告げながらも、その声は自嘲するようであった。

「私も……会う事さえせず、逃げ出して……ごめんなさい」

内心を吐露するジークハルトに、翠も距離を感じさせないよう、

普通の口調で語る。

「怖かった。……親しい人を作る事が。貴方だからじゃない。バルドルに感じたように、人というものに対して心を開く事が。——だから、逃げた」

顔を歪め、呟くように告げる翠の姿に、ジークハルトの顔も歪む。「本当に駄目だな、私は。——そんな事、思いもしなかった。それなのに、貴女がそれを怖がっていても、その心を無理矢理にでも抉じ開けたい私が居る」

そこで目元を覆っていた手を外すと、ジークハルトは真摯な声で翠に請う。

「私は、貴女が他の者と言葉を交わすだけで妬心を抱くような狭量きょうりょうな男だ。余裕など欠片も持たぬ。なれど——少しでいい、私を受け入れてはくれないか」

飾らないその言葉に、翠が柔らかに笑む。この世界に来てから下手ながらに笑っていたおかげで、それは次第にぎこちなさが抜けていた。

「もう、逃げないと決めたんです。——セルジオさんに言われたからだけでは無く、貴方と向き会おうと思って、今私はここにいます。その言葉に希望を見たのか、ジークハルトの顔から強張りが抜ける。けれど——」

「だから……ジーク、貴方にも私を見て欲しい。竜珠という存在ではなく、私自身を見て欲しい。それからでないと——私は、貴方の言葉を受け入れるどころか、受け止める事さえ出来はしない」

第27話 影

小さな音を立てて扉を閉じる。

閉じた扉にそっと触れ、翠は小さく溜息を吐く。

（……言い過ぎちゃったかな）

翠が最後に言い放った言葉に、凍りついたジークハルトの表情を思い出すと胸が痛む。

けれど、どうしても伝えたい事だった。

「……ごめんなさい」

言った事に後悔は無い。けれど、傷つけたい訳では無いのだ。

衝撃を受けたように言葉を失った後、考え込み始めたジークハルトをその場に残し、翠はそっと部屋から出たのだった。

「お話は終わられたのですか？」

すぐ傍から掛けられた言葉に、ガイが扉の前に居たことを思い出す。

「……ええ、今日はもう帰ります」

ジークハルトにも考える時間が必要だろう。

今まで言葉や行動で伝えられてきていた、重すぎるほどの好意。それを翠は根底から否定したのだから。

「門までお送り致します」

元よりそのつもりだったのだろう。ガイの近くにもう一人同じ様な服装の男が居た。

扉の前に男が立つのを確認した後、翠を促し歩き出した。

「……帰りは、こちらを通りましょうか」

沈んでいた翠への思い遣りなのか、ガイは花の咲き乱れる庭へと

誘う。

色鮮やかな花々を見ると、やはり自然と心が穏やかになる。心遣いに礼を言おうとガイを振り向こうとした時……突然鮮やかな色彩を帯びていた花々の色が暗く沈む。辺り一面も陰っているのに、少し先は彩り豊かだった。

雲が掛かったのかと顔を上げようとすると、今度は強い風が巻き起こり、花卉が空へと巻き上がる。

赤や薄紅、黄色や白。舞い上がる花吹雪に翠が見蕩れていると……すぐ傍で大きな羽音が聞こえた。

それが何かを悟り、羽音がした方向へと顔を向けると、そこには陽の光に鱗を輝かせたバルドルの姿があった。

《……我が送ろう》

今まで見たことが無いほど、不機嫌そうなバルドルの姿に無意識に翠の足が一步引く。それで余計に機嫌を損ねたのか、バルドルが低く唸りを上げる。

威嚇するバルドルの視線の先には、戸惑うガイの姿があった。

《翠よ、先日の森まで連れて行く》

いつも以上に低い声でそう告げると、バルドルは翠の返事も待たず優しい手付きで翠を掬い上げると、その強靱な翼を羽ばたかせ上空に舞い上がる。

強い風と、遠くなる地面。

凄い勢いで小さくなるガイの姿を目の端に捉えながら、翠はバルドルと共に青い世界を翔る。

「スイ様!!」

遠くでガイが呼びかける声に、翠も聞こえるよう大きな声で心配無い事を伝える。更にガイが何事か叫んでいるが、最早バルドルの羽ばたきでその声は聞こえない。

翠の静止を求める声を黙殺し、バルドルはさらに高みへ向けて舞い上がる。

急激な気圧の変化に耳鳴りがして、翠は己を掴んでいるバルドルの指を叩き、意識を向けさせようとする。だが様子の違うバルドルは中々気付いてくれず、とうとう頭痛がしてきた翠がぐったりとして漸く気付き、慌てて少しずつ高度を下げていった。

《すまぬ……》

まだぐらぐらする頭に手を当てている翠の前で、森に辿り着いたバルドルは長い首をしょんぼりと落とす。

その長い尻尾も今はへたりと力無く落ちていて、さすがに文句を言おうとしていた翠だったが、深い溜息を吐くだけしか出来なかった。

「どうしたの、急に」

ガイさんにもちゃんとお礼できなかったじゃない……と翠が呟くと、それまでしおらしかったバルドルの目が鈍く光った――。

第28話 嫉妬

バルドルの手が突然伸ばされ、その鋭い鉤爪の印象とは違い翠をそつとその手の中に収める。

どうしたのかと見上げようとすると、その長い舌でぺろりと翠の頬を舐めあげてくる。いつもと同じ動作のはずなのに……手の上に乗せるのではなく、捕らえるかのように翠の身体を包んでいるバルドルの手だけが違う。

見下ろしてくるその瞳に浮かぶ光も、ほわほわとした幸せそうなものではなく、どこか突き刺さるようで——不安になる。

ぐる……と低い唸り声を発したバルドルが、その鼻先を翠の首筋に埋めると……恐ろしい言葉を発する。

《其方を喰らうことが出来れば良いのに……》

そんな言葉を言いながらも、寂しげにその尻尾はへたりと落ちている。

《喰ろうてしまえば、其方は我の物になる》

「どうしたの……？」

普通であれば、怖いと思うかもしれない。こうして話している間も、目の前では真っ赤な口を開き、鋭い牙が列をなしているのだから。

けれど、翠は逆に切なくなってくる。傍に居るバルドルからは、ただ、悲しみが感じられるのだから。

《……………》

黙り込んだまま、翠に何度も擦り寄ってくるバルドルの鼻先に、翠は自分からも頬を寄せる。そうしてしばらく身を寄せ合っていたら……バルドルが悲しげな声で呟いた。

《あの男と大層仲が良いのだな》

「あの男……？」

バルドルが現れた時共にいたのはガイだった。けれど、そこまで仲が良さそうに見えるだろうか。店の馴染みではあるが、翠と個人的に親しいとかそういった訳でもないのに……とそこまで考え、ふと思い出す。

逢引きかと問いかけたハンナ。もしや……はた傍から見るとそう見えるのだろうか。

「も、もしかして……ガイさん？」

そういえば、先程もバルドルはガイの名を出した途端、機嫌を損ねたのではなかったか。

《是》

やはりか……翠が想像通りの答えに肩を落とす。

確かに、好意は抱いているが。助けてもくれたし、いつも見守ってくれている。その瞳は優しく……どこか頼っている部分もあったかもしれない。けれど、バルドルにこうして嫉妬されるような関係では決してない。ない……はずだ。

考えれば考えるほど、優しいその黒い瞳を思い出し、翠の脈が僅かに速くなる。

ぐるぐると思考の渦に巻き込まれている翠の姿に、バルドルがまた唸り声を上げる。

「ち、違うから！！ガイさんとはそういった関係じゃないから！！」
必死に動かせる首を左右に振る翠に、バルドルは懇願するように擦り寄る。

《其方は我が伴侶だ……》

消沈し、今にも捨てられそうな雰囲気放つバルドルに、ただ違うとしか返せない翠は次の言葉に呆然とする。

《その心の内に、他の者を住まわせるのか……？》

翠の感情から何が伝わっていたのかは解らない。バルドルのその言葉には……嫉妬や怒り。悲しみ以上に……恐怖が滲んでいたから。

困惑する翠の頬をそつと舐め上げると、バルドルは自嘲するように瞳を伏せた。

《其方を困らせたいわけではないのだ……すまぬ》

「……大丈夫だよ」

手を緩めて。そう告げると翠は素直に開かれたバルドルの掌の上に立ち、その頭を胸に抱え込む。

「まだ、ね。まだ、私は人を愛するには早いと思う」

ガイの事も好きだ。だがその好意はバルドルやコウに対する物と違うのかと考えても……答えが出ない。ジークハルトの事さえ、先程好意を抱いたのだ。以前惹かれていた相手でさえ、自分の事を解ってくれるかもしれないから。そんな思いが根底にあった。けれど、それは……きつと違う。

「バルドルには失礼な話だよね……」

婚姻までしている相手に、こんな事を言われれば、バルドルとしては立つ瀬が無いだろう。

「でも、嘘は吐きたくない……」

伴侶だからじゃなく、自分を大切に思ってくれている皆には素直であろうと思う。それくらいしか、今の自分にはできないのだから。翠は悲しげに笑むと、目を閉じたままのバルドルの目蓋にそつと口付ける。

「ごめんなさい……」

《………》

ざわり、ざわりと木の葉が風に吹かれる音だけが辺りを包む。

どちらも身動きしないまま、ゆっくりと陽だけが傾いて行く。それでも翠はバルドルを抱き締めたまま、バルドルが抱くであろう怒りを受け止めようとしていた。

遠くで八つの鐘が鳴り響く。風に乗って聞こえるその音は寂しげで、翠の腕に力が籠る。

《……解って居る。其方の心がまだ我等に無い事は。だが……我は

其方が愛しい。出逢った時よりもその思いは強くなるばかり。知識の無い其方と儀を交わしたものの、其方の心がまだ幼き事も気付いて居った。なれど……あの様に、他の雄と共に在る姿は、我慢ならなかった」

その腕に促されるように、バルドルが重い口を開いた。

《我等は、其方の心を未だ得ては居らぬというのに……》

「……私も。前よりバルドルの事が大切になってる。バルドルがくれた優しさも、思いも、私の中にしっかり伝わってる」

そう告げる翠に、バルドルは漸く甘えるように喉を鳴らす。

《ならば……今以上に、其方の心を我等に向けてみせようぞ》

「怖いなあ……なら、私も……自分の思いを隠す事だけはしない。そう約束する」

もしも何らかの気持ちを自分が誰かに抱いたのなら、その後どうなってしまうかと素直に告げよう。バルドルにも——ジークハルトにも。

幕間 興味 Sideセルジオ

「こちらに署名を……」

セルジオは、手にしていた書類の束をジークハルトに差し出す。先程、翠がジークハルトを残し去った後、酷く憔悴した様子の主に容赦なく執務の続きを促した。

あのような主の姿を見るのは久々だった。

代々の竜王は次代の側近を早くに指名する。それは後に産まれて来る次代を教育する役目がある為、あらゆる知識を与えなければならぬからだった。

そんな重大な役目だというのに、まだ年若いものや、場合によっては城で勤めてさえ居ない者が選ばれた事もある。

だが野生の勘とでも言うのだろうか……そうして選ばれた者が己の私欲を満たそうとする事は無く、二心無く仕えるものばかりであった。

セルジオも例に漏れず、見習いとして城に上がったばかりの頃、突然に前の竜王より次代を支えよとの命を受けたのだった。

幼い頃には、何度もあんな憔悴した顔をしていた。幼くとも、次代が産まれれば今代の竜王は急激に力を失う。そうなれば次代が執務を執り行えるようになるまで支えるのは周りの者だ。セルジオ自身、傍に仕える事が決まってからというもの、おびただ夥しい量の知識を与えられてきた。

同じ様にジークハルトにも、傍で支えつつ、容赦無い教育を施してきた。

……幼い体と心に膨大な知識を与えられ、いつも憔悴しきっていた。体力だけは人並み外れてあるものだからセルジオは手心を加える事は無かった。

そのうち、竜珠の姫が見つければ、その者が主の心は癒してくれる。だから私は、力を与えよう。そんな思いで仕えていて……竜珠の姫が存在しない事に気付いたのは何時の日か。

次第に狂い始める竜身の感情が流れ込み、主はいつも険しい顔をするようになった。

憔悴ではなく、焦りと……諦めを浮かべ始めたのはそれから暫くしてからだった。

どうせ眠れぬと、執務を終えた後にあらゆる文献を調べ……一冊の古びた本を見つけ出した時の、全てを覚悟した顔は未だ忘れられない。

命を掛け、呼び出したはずの存在が……現れなかった瞬間の、叫びを今も覚えている。

召喚が成功したと知ってからは、その存在を求め、深夜に忍んで出掛けていたのをガイに後を追わせる事で黙認していたのはつい先日。の事。

出逢いを果たしてからは、まるで幼い頃から抑えつけた感情を解き放ったかのように、次々と表情を変える。その姿が教育を施し始めたばかりの幼い頃のようにだった。

行き過ぎた言動に、反射的に手が出てしまったが、こんなやり取りは幼い主に知識を与えていた頃以来だった。

「……予算が多い。内容には問題が無いが——監視を付けろ。この機に乗じて私腹を肥やす者が現れぬ様、目を配らせよ」

「畏まりました」

次々と書類を裁いて行く間に、時折問題がありそうな物を抜き出して行く。

「これは……調べなおせ」

「……？これといって問題は無いように感じたのですが……」

灌漑施設かんがいの工事は、該当の地区は未だに整備が行き届いていない場所、セルジオとしては納得の行く要望であったが……。

「確かに。ただ何か……裏がありそうだ」

「直ちに調査致します」

ジークハルト本人は、こうして大きな問題無く政務を行えるのはセルジオの存在が大きいと思っているようだが……こうした、ジークハルトが異を唱えたものに限って何らかの大きな問題を抱えている事が多かった。

歴代の竜王もそういった勘が冴えていたのだろう。この国が豊かになった理由は、後継間の争いが無かっただけではない。皆が認めている王とはいえ……欲を持つものや、治世に不満を抱くものが消える事など無い。今の平穏は歴代の竜王がそれらの火種が大きくなる前に潰してきたからだだった。

「……どうして、その冷静さや勘がスイ様相手には発揮されないのかが不思議でなりません」

不意のセルジオの言葉に、ジークハルトが手にしていた書類を落とす。

「また、何か失言でもされたのですか？」

執務が一段落した事もあり、セルジオは今まで放置していた主の憔悴の原因を問う。

「……………」

無表情に執務をこなしていたはずのジークハルトの顔が面白いほどに歪む。

（——本当に、感情を隠しきれない）

余程の事が無い限り、大きく表情を変えなくなっていた主が、竜珠の姫が関わると些細な事でも表情を変える。

その姿に、にやりと不穏な笑みを浮かべたセルジオは、黙り込んだ主を更に問い詰める。

「それとも、またもや大人げ無い態度を？ ガイが迎えに行った時か

ら不機嫌でしたよね？……それとも、私がこの部屋では一切口を開くと言ったのが不服でしたか？」

苦勞をかけたであろう相手に正式に謝罪をしようとしていた為、セルジオはガイが出迎える事で機嫌を損ねているジークハルトに無言を強いたのであった。案の定、嫉妬に駆られていた所に、他人行儀に呼ばれた事でまたもや失言をしていた。

「いや……あれは、お前が正しい。己の勘違いを思い知らされたかならな」

素直に己の非を認める姿に、セルジオが柔らかな笑みを浮かべる。――本当に、この柔軟さや素直さ。せっかく持っている美德どころか、普段ならありえない失態ばかり見せる主の姿が可愛いやら情けないやら。

「だが……言われてしまった。『私』を見ていないと」

「それは……？」

「竜珠としてしか見ていないと、言われてしまった」

苦い顔をするジークハルトの説明に、セルジオは理解すると共に……翠のその発言に感心する。

「思ったよりも冷静ですね……スイ様は」

ジークハルトにあれほど執着されながらも、そこに気付くとは。竜王と竜珠は互いに惹かれあう存在であるから、問題は無いだろうと構えていたセルジオにしてみれば誤算であった。

「それで……どう思われました？」

あれほど憔悴していたのだ。今までの思いを否定されて、どう感じたのか。さり気無く目を細め、ジークハルトの様子を伺う。

苦々しい顔をしていたジークハルトの口元が不意に緩む。

「余計に興味を持った。これは、あれが竜珠だからでは無い。翠だからだ――」

やられた、と呟くジークハルトの表情に、セルジオは内心呟いた。
(これは、本当に惚れられましたね、スイ様――)

第29話 暗雲

変わった。

顔を合わせた瞬間にそう感じた。

ガイを扉の前に残し、部屋へ一歩踏み込んだ翠は不思議そうにこちらを見つめるジークハルトの姿を眺める。

「どうした？ 翠」

「いえ、何でもありません」

そう答えながらも、翠はふわりと笑う。

同じようにこちらを見つめる瞳。ただそこに浮かぶ光が今までとは違っていた。今のジークハルトはきちんと自分を見てくれていることが判る。

前のように熱に浮かされたようなものではなく、そのままの自分を見てくれている視線。

今も翠の反応が不思議だったのか、その理由を探すように伺っているのだ。

勝手な言葉を投げつけたまま立ち去ったというのに、その意味をきちんと考えてくれた事が嬉しい。

そして、突然認識を変えろと言われても無理だろうと、長い期間を想定していたというのに、すでに変わり始めているジークハルトに翠の口元が自然と緩む。

「……まあ、貴女がそうして笑ってくれているのは嬉しいがな」

まさかジークハルト自身の変化を喜んでいたとは想像できず、翠の笑みの理由を探りきれなかったジークハルトはそう告げると、滲むような笑みを浮かべる。

こうして穏やかに笑むと、年相応の色気を感じてしまうのだから

質が悪い。

「私が悪いんだろうが、最初は睨まれてばかりだったからな。……だから、私にそんな顔を向けてもらえると——期待してしまいそうになる」

すると翠の白い手を掬い上げると、ジークハルトはその甲へとそっと口付ける。

「な……っ」

素早く手を引くと、軽く添えられていただけだったせいか、ジークハルトの手の中から翠は己の手を取り戻すことが出来た。

咎めるような視線を向けても、ただ嬉しそうにするものだから調子が狂う。

暫く睨みつけてみたものの、楽しそうにこちらを見るジークハルトに気が抜けて、翠の口許も自然と緩んだ。

そんな時間を何度か繰り返したある日——いつものようにジークハルトの前を辞した翠が城を出て、しばらく歩いていると、ご機嫌にふわふわ浮いていたはずのコウが騒ぎ出す。

《スイ！スイ！変な人がついて来る！》

「変な人？」

《うん……何か、嫌な感じの人がずっと着いてきてる》

逃げて逃げて、と騒ぐコウに、翠は即座に近く的路地に身を潜め、コウに頼んで姿を隠してもらう。コウが翠の全身を取巻くのと同時に、見知らぬ男達が狭い路地に数人駆け込んでくる。

「ちっ……見失ったか」

「手分けして探せ！女の足だ、まだ遠くには行っていないだろう！」

潜めた声で交わされる会話の内容に、翠の表情が強張る。この路地には翠の他に人影は無かった。となると……この男達が探しているのは自分に他ならないだろう。

少しでも情報が得られないだろうかと、男達の中でも、指示を下していた人物の後をそっと付けて行く。しばらくは辺りを探し回っていたものの、翠の姿が見えない事で諦めたのか、再び集い解散の運びとなった。

散り散りに去る男達の顔を見渡しても、見知った顔は一つも無かった。その場から人の影が消えうせた後、ぽつりと翠はコウに問いかける。

「どこから、ついてきてたの……？」

《お城を出てからずっと。最初は気のせいだと思ったんだけど……》

コウの言葉に、翠は考え込む。城を出てからという事は……城の関係者。翠が関わる事といえば、ジークハルトとバルドルに関してのみだ。

今まで出会った人は皆竜珠という存在を求めていたが……もしかして、厭う者も居るのだろうか。

セルジオの言っていた事を思い出す。

世襲では無いから一代限りとはいえ、代々の竜王に阿る者おもねはいるのだ。そういった存在からは邪魔な存在なのだろうか。だが、竜王の心の安寧の為には竜珠は必要らしいのに……

考えても、知識の浅い翠には正しい答えを導き出す事が出来ない。これ以上一人で悩んでも無駄だと意識を切り替え、身を隠したまま帰路につく。

それが、不穏な日々への幕開けであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7454y/>

召喚されてみたものの

2012年1月10日01時47分発行